

第14回図学国際会議京都大会

鈴木広隆 (実行委員長・大阪市立大学)

はじめに

第14回図学国際会議京都大会は、京都大学百周年時計台記念館に於いて、2010年8月5日から9日まで開催された(図1参照)。本会議の主催は国際図学会(International Society for Geometry and Graphics)、共催は日本図学会であり、その他、15の寄付団体(うち、2団体は助成)と13の協賛団体の協力を得て開催された。8月の猛暑の中での開催であったが、幸い天候にも恵まれ、エクスカージョンやバンケットを含む当初のスケジュールをすべて行うことができた。

会議の参加登録者は209名(招待講演者5名、歓迎講演者1名を含み、同伴者は含まない)であり、そのうち198名が会議に参加した。登録者のカテゴリー別内訳は、デリゲート183名、学生26名で、他に同伴者が23名参加した。また国別では、日本国内からの登録者が103名と最多で、以下中国31名、イタリア13名、オーストリア10名、アメリカ7名、ドイツ7名と続き、全体で27の国と地域から参加登録が行われた。

各行事の内容は、全体報告以降において、会議参加者、組織委員と実行委員の方々によって詳述されるので、本報告では会議の概要と、会議に至るまでの経過を中心に記述を行うこととする。

会議の概要

会議は京都大学百周年時計台記念館の8室を用いて行

われ、開会式閉会式用に1室、パラレルセッション用に4室、ポスターセッション用に1室、企業展示用に1室、受付とスタッフ用控室として1室を割り当てた。プレナリーセッションやポスターセッションのショートプレゼンテーションの際は、パラレル用の4室のうちの隣接する2室の間仕切りを外して1室として使用した。

表1に会議のスケジュールの概要を示す。会議は8月

表1 図学国際会議のスケジュールの概要

5-Aug	6-Aug	7-Aug	8-Aug	9-Aug
Thursday	Friday	Saturday	Sunday	Monday
	Opening Ceremony	Plenary Session PS2	Plenary Session PS3	Technical Session TS7
	Short Break	Coffee Break	Coffee Break	Coffee Break
	Plenary Session PS1	Technical Session TS3	Technical Session TS6	Technical Session TS8
	Lunch	Lunch	Lunch	Lunch
	Technical Session TS1	Technical Session TS4	Official Excursion in Kyoto City	Closing Ceremony and ISGG General Meeting
	Short Break	Coffee Break		
	Technical Session TS2	Technical Session TS5		
Registration	Coffee Break			
Welcome Reception and Lecture	Poster Session POS		Conference Dinner	
	ISGG Board Meeting			



図1 開会式後の集合写真



図2 歓迎バンケットの様子

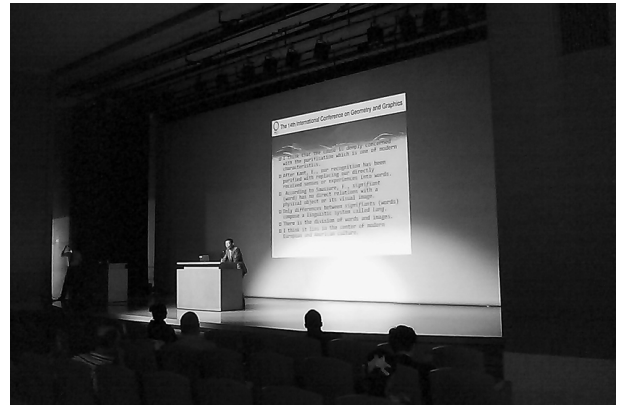


図4 Theodore BRANOFF 図学国際学会会長の挨拶



図3 宮崎興二先生の歓迎講演



図5 Tibor TARNAI 先生の講演

5日15:00に開始したレジストレーションから正式にスタートした。しかし、その前の13:30-14:30に図学会総会が開催されていて、受付時の混雑を回避するために日本人参加者には総会前後のレジストレーションをお願いしたため、実際には総会前から緩やかなスタートを切った形となった。その後、15:00から続々と海外からの参加者の受付が始まった。

歓迎バンケットは17:15から伊從勉副組織委員長の挨拶で始まり、軽食をつまみアルコールやソフトドリンクをたしなみながら、多くの方が旧交を温め、また新しい仲間を歓迎した(図2参照)。

その後、司会の伊從勉副組織委員長より宮崎興二組織委員による歓迎講演がアナウンスされると、それまでバンケットを楽しんでいた参加者の方々が着席し、大変な熱気の中での歓迎講演となった。宮崎先生も90分を超える熱演で会場の熱気に応えて下さった(図3参照)。

8月6日は9:20より大ホールで開会式が行われた。開会式は、山口泰嗣実行委員長の司会で、加藤道夫組織委員長、Theodore BRANOFF 国際図学会会長(図4参照)、堤江美子図学会会長、伊從勉副組織委員長より挨拶が行われ、さらに前回の図学国際会議(ドレスデン大

会)を代表して、Gunter WEISS先生(Dresden University of Technology)よりお言葉を頂いた。引き続き舞台中央にカメラを設置し、参加者の方々に客席側に整列頂いて撮影したのが図1の記念の集合写真である。

ショートブレイクの後、開会式と同じ大ホールでプレナリーセッション1(司会:椎名久美子実行委員、Gunter WEISS先生)が行われた。このセッションでは、Tibor TARNAI先生(Budapest University of Technology and Economics)による“TURNED IVORY POLYHEDRA”(図5参照)、及び籾内佐斗司先生(東京芸術大学)による“AN INTRODUCTION TO THE USE OF 3D DIGITAL DATA OF CULTURAL PROPERTIES (SCULPTURE) IN EDUCATION AND RESEARCH”という2つの講演が行われた。

昼食をはさんだ午後からは4室同時並行の平行セッションが始まり、ショートブレイクを挟んで合計8つのセッションが行われた。なお、過去に開催された図学国際会議の平行セッションでは、3会場同時進行の形がとられることも多かったが、今回の会議では論文数とスケジュールの関係で、最初から最後まで通して4会場同時進行の形で行った。



図6 ショートプレゼンテーションの様子



図7 ポスターセッションの様子

パラレルセッションの後、コーヒブレイクを挟み、ポスターセッションが行われた。ポスターセッションには28編の論文が提出されていたが、事前にポスターセッション担当の安藤直見実行委員が発表者のパワーポイントファイルを集め、これを用いて1人90秒ずつのショートプレゼンテーション（図6参照）が行われた。その後、会場をポスターが貼られた部屋（図7参照）に移し、それぞれのポスターの前で質疑応答が行われた。なお、6日午後には、京菓子店「亀谷良長」で和菓子作りを体験する同伴者ツアーも行われた。

8月7日は9：10からのプレナリーセッション（司会：Theodore BRANOFF 国際図学会会長，田中一郎実行委員）で始まった。このセッションでは、Clark CORY 先生（USA Purdue University）による“BIM AND ITS IMPACT ON ENGINEERING & GRAPHIC COMMUNICATION EDUCATION”と山下敏男先生（首都大学東京）による“RESEARCH OF DIGITAL LEAD DESIGN PROCESS”という2つの招待講演が行われた。さらに、午前中後半に、計4つのパラレルセッションが行われた。午後には計12のパラレルセッションが行われ、並行して、妙心寺春光院にて座禅体験



図8 大江能楽堂での面の装着体験の様子

と庭園散策を行う同伴者ツアーが行われた。

8月8日は前日同様、9：10から始まるプレナリーセッション（司会：Otto RÖSCHEL 国際図学会副会長）からスタートした。このセッションでは、Hans-Peter SCHRÖCKER 先生（University Innsbruck）による“DISCRETE GLIDING ALONG PRINCIPAL CURVES”と題した招待講演が行われた。その後、午後の後半には、計4つのパラレルセッションが行われた。

8日午後からのエクスカージョンでは、参加者は4台のバスに分乗し、京都大学から大江能楽堂に向かった。大江能楽堂では、能の歴史、楽器や衣装・能面の説明等について通訳を介した解説が行われた後、参加者による能面の装着体験が行われ（図8参照）、さらに羽衣の一部が上演された。その後、参加者は能楽堂を後にして、またバスに分乗して清水寺に向かった。大江能楽堂と清水寺の距離はそれほど長くないが、折りしも当日を含む数日は五条坂で陶器市が開催されており、周辺一帯の道路は渋滞していたため、移動には40分ほどを費やした。清水寺到着前にバス内で、バンケット会場までの移動方法（清水寺散策コース、産寧坂でショートカットするコース、バスで移動するコース等）が示され、以降はバンケット会場まで参加者がそれぞれの判断で移動することとなった。エクスカージョンを担当した図学国際会議関西 Task Group では、この間の移動の際の迷子を一番心配していたが、猛暑の中でルートの分岐点に立って案内役を務めた学生スタッフの献身的な努力と、海外からの参加者の間に分散して入り迷子にならないように気を配って下さった日本人参加者のご配慮により、1人の迷子も出さずにバンケット会場へ移動することができた。清水寺でのひとコマを図9に示す。

バンケット開始予定時刻は19：00であったが、数多くの参加者が会場であるザ・ガーデンオリエンタル京都に早めに到着していたため、正式な開始前から五月雨式に

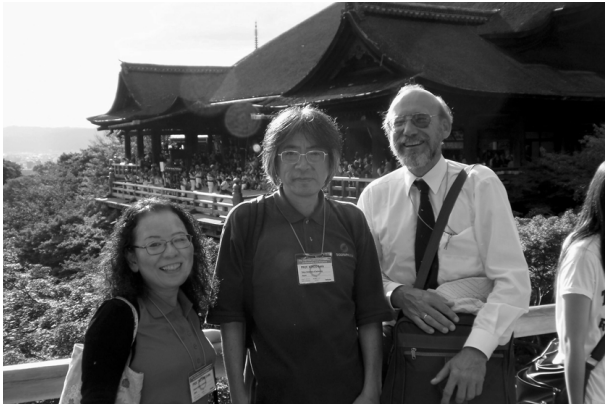


図9 清水寺でのひとコマ



図11 Slaby Award 2010の授与



図10 日本人参加者による「ふるさと」斉唱の様子

各所のグループで乾杯が始まっていた。その後、飯田尚紀実行委員の司会によりバンケットが始まり、Theodore BRANOFF 国際図学会会長による挨拶、招待講演者の交通費を助成して下さった大阪電気通信大学理事長の福田國彌先生による挨拶が行われた。そして、鈴木賢次郎組織委員による乾杯の挨拶があり、正式に歓談が始まった。パーティーの半ばで、関西を代表して吉田勝行組織委員による挨拶が行われ、それに引き続き、平野重雄組織委員の指揮で日本人参加者による「ふるさと」斉唱が行われた(図10参照)。その後、様々な国々の参加者より、それぞれの国の歌が披露され、それは閉会の挨拶まで切れ目なく続いた。Otto RoSCHEL 国際図学会副会長による閉会の挨拶の後、参加者は名残を惜しみつつ、バンケット会場を後にした。

8月9日は、午前計8つのパラレルセッションが行われた。午後は、Theodore BRANOFF 国際図学会会長の司会により、国際図学会大会が行われた。ここでは、鈴木広隆による図学国際会議の報告、国際図学会の副会長と理事の紹介、Journal for Geometry and GraphicsのManaging EditorであるHellmuth STACHEL先生(Vienna University of Technology)による報告、及び

Theodore BRANOFF 国際図学会会長による会長報告が行われた。

引き続き、阿部浩和組織委員兼実行委員の司会で図学国際会議の閉会式が行われた。閉会式ではまず、Slaby Award 2010の授与式が行われた。Slaby Awardは、Theodore BRANOFF 国際図学会会長より、McGill UniversityのPaul ZSOMBOR-MURRAY先生に贈られた(図11参照)。続いて、同じPaul ZSOMBOR-MURRAY先生より、次の図学国際会議が開催されるMcGill Universityとモントリオールの紹介が行われた。その後、VARIKAN Thomas THOMAS先生(RMIT University)により図学国際会議のResolutionが読み上げられ、図学国際会議の運営に尽力した委員の紹介が行われた後、Theodore BRANOFF 国際図学会会長の挨拶で閉会式は終了した。参加者は、「ふるさと」のBGMが流れる中、会場を後にした。

企業展示について

企業展示は、アルテック株式会社、オートデスク株式会社、株式会社島津製作所、ソリッドワークス・ジャパン株式会社、ニューリー株式会社の5社に協力頂き、それぞれ1800mm×900mmのブースの中で展示をして頂いた。いずれも最先端のグラフィクス・モデリング関連技術であり、海外からの参加者の注目を集めた。各企業のご協力とそれぞれのスタッフのご尽力に心より感謝します。

国際会議開催まで

本会議に向けての動きは、2007年10月の図学国際会議誘致WGの発足に遡る。このWGでの予備的検討の後、図学会理事会において、第14回国学国際会議の開催都市として立候補することが決定された。そして、第13回国学国際会議期間中の2008年8月5日にドレスデンで

行われた国際図学会理事会では、他にも立候補している都市があったが、投票により京都で開催されることが決定し、国際会議閉会式において加藤道夫図学会会長（当時）が京都を紹介し、積極的な参加を呼びかけた。京都での図学国際会議開催の正式決定を受け、図学国際会議誘致WGメンバーを中心として図学国際会議準備委員会が設立され、2008年に立教大学で開催された本部例会の初日（11月29日）夜に池袋駅付近のレストランで第1回の委員会が開催され、様々な課題が検討された。さらに、伊従勉組織副委員長と西原一嘉組織副委員長のご尽力により、京都大学を会場として利用できることとなり、2009年2月7日には準備委員会メンバーによる京都大学の視察が行われ、様々な候補の中から京都大学百年時計台記念館を会場として利用することが決まった。その後、組織委員会と実行委員会の委員候補が決定し、2009年3月18日と4月6日に組織委員実行委員候補も含めて準備委員会が開催され、以降組織委員会と実行委員会が発足した。組織委員と実行委員のメンバーを表2に示す。

筑波技術大学で開催された2009年度図学会大会期間中である2009年5月10日には、第1回組織実行合同委員会が開催され、会場、開催期間、期間中のスケジュール予定、今後のスケジュール、募集論文のテーマ、ロゴマーク案（齋藤綾実行委員と面出和子組織委員によるデザイン）が紹介された。その後、実行委員会は2009年8月24日から2010年2月3日の第4回まで、計4回開催され、様々な課題について話し合いが行われた。国際会議開催前の半年間に実行委員会は開催されていないが、これは準備のための膨大な作業によりまさに「会議を開催する時間もない」状態で、プログラム委員会によるミーティング、プロシーディンググループによるミーティング等は頻繁に行われた。また、組織委員と実行委員メンバーによる情報共有は、主として電子メールで行われた。

並行して関西では、図学会関西支部所属の組織委員、実行委員を中心に、図学国際会議関西TG(Task Group)が組織され、2009年2月16日の第1回から会議終了後の打ち上げを兼ねた2010年10月18日まで、12回のミーティングを行った。この間、役割分担の確定、クレジットカード払い対応やエクスカッション・バンケットに関する業務を委託する業者の選定、エクスカッションの内容の検討、バンケット会場の選定、バンケットメニューの検討などが行われた。また、国際会議の直前には、カンファレンスグッズの選定、名札の作成、会場の設備の視察と操作方法の習得、同伴者ツアーの内容の吟味、会議期間中のロジスティクス詳細の検討などを慌しく行っ

表2 組織委員会・実行委員会名簿（敬称略）

組織委員会		実行委員会	
委員長		委員長	
加藤 道夫		鈴木 広隆	
副委員長		副委員長	
伊従 勉	西原 一嘉	小高 直樹	横山 弥生
近藤 邦雄	早坂 洋史	山口 泰	
桜井 俊明	福田 幸一	委員	
委員		阿部 浩和	中嶋 節子
阿部 浩和	長島 忍	安藤 直見	中田 亮生
新井 淳子	永野 三郎	飯田 尚紀	新関 雅俊
荒木 勉	西垣 安比古	大月 彩香	西原 一嘉
有吉 省吾	西原 小百合	大西 道一	橋寺 知子
稲葉 武彦	畠山 絹江	金井 崇	隼田 尚彦
井野 智	平野 重雄	川崎 寧史	廣瀬 健一
今淵 正恒	藤原 順介	木多 彩子	福江 良純
大西 道一	本郷 健	久保 明雄	松岡 龍介
大野 義夫	前田 真正	高三 徳	松田 浩一
大村 勝	町田 芳明	齋藤 綾	三谷 純
小高 直樹	宮井 あゆみ	榭 愛	宮腰 直幸
梶山 喜一郎	宮崎 興二	椎名 久美子	宮本 昌彦
喜瀬 晋	村松 俊夫	菅井 祐之	安福 健祐
倉田 和夫	面出 和子	田中 一郎	山島 一浩
小林 範夫	森田 克己	辻合 秀一	横山 ゆりか
近藤 慎二	安富 雅典	奈尾 信英	吉田 晴行
坂本 勇	矢野 康一	長坂 今夫	
佐久田 博司	矢野良治		
鈴木 賢次郎	山内 一晃		
鈴木 宏正	横沢 肇		
高見 征二	横山 弥生		
知花 弘吉	吉田 勝行		
堤 江美子			

た。特に、エクスカッション先の清水寺からバンケット会場への移動については、入念な打ち合わせを行った。

この間の、組織委員、実行委員、その他の方々の奮闘振りについては、詳述し始めると膨大な量になってしまい、また一番厳しい作業となった学術面と財務面については別途詳しい報告があるため、ここでは特に負荷の大きかった役割を担った方々と、明るく積極的で心のこもったおもてなしの原動力となった学生スタッフのお名前を挙げるのみとさせていただきます。

学術及び全般：山口泰副実行委員長

財務：椎名久美子実行委員、小高直樹組織委員兼副実行委員長、榭愛実行委員

査読及びプログラム編成：山口泰副実行委員長、安藤直見実行委員（ポスターセッション）、金井崇実行委員、

三谷純実行委員

論文フォーマット・文書作成：田中一郎実行委員

プロシーディングス編集：金井崇実行委員，齋藤綾実行委員

プロシーディングス校正：田中一郎実行委員，面出和子組織委員，横山ゆりか実行委員

Web管理・プログラム作成システム構築：金井崇実行委員

論文投稿査読システム構築：三谷純実行委員

ロゴデザイン：齋藤綾実行委員，面出和子組織委員

フライヤー作成，Web・小冊子・サイン・看板デザイン：齋藤綾実行委員

中国との窓口：高三徳実行委員

学生スタッフ統括と会場運営全般：阿部浩和組織委員兼実行委員

会場機器全般：安福健祐実行委員

カンファレンスキット・名札作成：吉田晴行実行委員

受付：椎名久美子実行委員，吉田晴行実行委員

エクスカッション・バンケット：飯田尚紀実行委員

同伴者ツアー：木多彩子実行委員，榊愛実行委員

全体統括：加藤道夫組織委員長，堤江美子組織委員

学生スタッフ（敬称略）

大阪大学

羅羽哲，ボンサワサイサワン，高橋彰，福井美弥，杉江順哉，末重隼人，大島康徳，濱野真由美，出来祐也，中野舞，柏木俊弥，一色暁生，山出翔太
大阪電気通信大学

山縣融，伊藤和裕，中西博視，扇健太，西田翔太
大阪市立デザイン研究所

尾柳彰則

大阪市立大学

武智浩二，隅内修，藪中功嗣，田中雄大

ここに挙げさせて頂いた方々以外にも，多くの方々のご尽力により，会議を成功に導くことができた。深く感謝致します。

国際会議開催まで及び開催中のあれこれ

国際会議開催まで，及び開催中には，事前に予期していなかった数多くのことに直面した。将来国際会議が図学会主導で開催される時のため，それらの雑多なことをここに記す。

学術関係

スケジュールの確認，査読結果の問い合わせ，掲載決定通知の送付依頼など，学術面の問い合わせが多数あっ

た。所属機関で手続きをしないといけないので掲載決定通知が欲しい，という連絡が掲載決定前に来たケースでは，言葉を選んで慎重に対応し，文書を作成して送った。また，これは山口泰副実行委員長のプログラム委員会の報告にも詳しく書かれていると思うが，最終論文提出後のフォーマットの調整や各種の不整合の対応が非常に煩雑で，プログラム委員会メンバーには多大なる負荷をかけてしまうこととなった。

入出国関係

日本入国に際してVISAが必要な国には，招聘側が書類を送る必要があり，招聘責任者が大学教員の場合は「招へい理由書」，「滞在予定表」に加え，招聘責任者の所属機関が発行する在職証明書（日本語）があればよく，通常の手続きに必要な身元保証書は免除される。しかし，このことが当該国日本国大使館から参加者にきちんと伝わっていないこともあり，説明しても，「身元保証書がないとVISAが出ない」と繰り返されるケースがあった。VISA申請にはこれらの書類の原本が必要になるため，請求に応じて書類を作成して送付する作業は手間のかかるものであったが，高三徳実行委員が窓口になり，VISAが必要な中国からの参加者25人分のデータの収集と完成した書類のチェックを中国図学会を通して行うことができたため，作業の手間を大幅に低減することができた。また，中国在住で別国籍の参加者のケースでは，「VISA発給まで1ヶ月以上かかるので間に合わず，短縮する場合は主催者が上海領事館に電話をかけるように言われた」という連絡があった。このため，暇を見て何度も上海領事館に電話をかけたがつかない，という状態を数日繰り返し，外務省本省に電話をかけて何とか対応頂いた，ということもあった。なお，会議直前の7月の終わりになって，これまで全く参加実績がない国から参加のみ（論文発表なし）のVISA書類発行の依頼があった。これらのうち，VISAが取れたので参加する，という連絡があったにも関わらず，会場には現れなかったケースもあり，会議直前の慌しい時期を狙って国際会議参加以外の目的でVISA申請書類を要求していた可能性も考えられた。いずれにしても，VISA申請書類の請求締め切りを設け，これを厳格に運用すべきであったと考えられる。

その他のロジスティクスに関わること

参加費のレシートは，それぞれの参加者の名前が入ったものを作成・印刷してレジストレーションの際に渡したが，渡航費を助成する団体に提出する，などの理由により，事前に電子ファイルあるいはスタンプを押した実

物が必要である, というリクエストが何件かあった. また, 確実に会議に参加したという証明が欲しい, というケースが会議期間中に何件かあった. これは, 職場が提出を義務付けているもので, その場で椎名久美子実行委員が作成・印刷して対応した. 参加費のキャンセルポリシーは, 会議直前の7月下旬に作成し, 通知を行った. 幸い, キャンセルの際の返金額に関わるトラブルはなかったが, これは参加費の受付を始める前の段階できちんと定めてアナウンスすべきであったと考えられる.

おわりに

2009年2月7日に実行委員長を拝命してからの約1年半は, あっという間であったし, 長く厳しい期間でもあった. 本来, 「長」と名の付く立場にあるものは, 自分の割当分の仕事は余裕を持ってこなした上で, 全体を眺めて他の人の割当分の調整をしたり, 先を睨んだ計画を練ったりするものであるが, 私自身, 締め切り間際の自転車操業でやりくりする性分がどうしても抜けず, 各所にご迷惑をおかけした. また, 私自身の実力不足で, 毎日到着する膨大な量のメールを見ながら, 「自身のキャパシティを越えてしまった」と感じたことも何度もあった. こんな危なっかしい実行委員長でも何とか会議が成功したのは, ひとえに, 山口泰副実行委員長をはじめとする, 仕事を的確にこなす能力に優れている上に長期的展望に立って物事を計画的に考えることができる素晴らしい方々に囲まれていたからであり, そういった方々と力を合わせて走り抜くチャンスを頂けたことは私にとって大きな幸せであった. 会議の準備と運営に携わった全ての方々への深い感謝をもって全体報告の締めくくりとさせて頂く.

第14回図学国際会議 プログラム委員会の活動について

山口 泰 Yasushi YAMAGUCHI (実行副委員長・東京大学)

第14回国学国際会議に関する作業も, ほぼ全体のメドがつき, 今週末の2010年11月28日には最後の組織・実行合同委員会が開かれる予定となっている. この機会に, プログラム委員会関連の活動に関する記録を簡単にまとめておく.

1. 実行委員会の始動

おそらく鈴木広隆実行委員長の記録に, 実行委員会の詳細な活動が説明されると思うが, 組織委員会ならびに実行委員会は2009年5月10日の筑波技術大学天久保キャンパスにおける日本図学会春季大会で第1回合同委員会が実施された. この委員会開催に先駆け, 2009年2月から4月にかけて, 実行委員会の準備委員会が開催されており, 実行委員会の方針が議論された. この準備委員会において, 全体の総括に鈴木実行委員長があたり, 会場関連の諸々の作業は在関西の委員に担当していただくことが確認された. それ以外の, 学術・総務に関しては, 以下の事項が議論された.

- ①図学国際会議の公式ウェブサイト
- ②図学国際会議用のメーリングリスト
- ③フライヤーの作成, その他のデザイン
- ④財務管理
- ⑤Extended Abstract (以下, 抄録) の審査方法

①と②は金井崇委員と三谷純委員, ③は齋藤綾委員, ④は椎名久美子委員, ⑤は山口が, 主に担当することとなった. この報告はプログラム委員会の活動を中心とするが, 財務担当の椎名久美子委員は, 精確かつ敏捷な対応によって財務全般を管理していただき, 感謝に堪えない. なお, プログラム関連では, 以下のスケジュールが決められた. ちなみに, このスケジュールは後に2回ほど変更されることになった.

2009年11月30日	予備登録メ切
2009年12月15日	抄録メ切
2010年1月30日	採択通知
2010年4月30日	本論文メ切
2010年8月5~9日	会議

また原稿や発表の形式と量については, 以下のよう
決められた.

抄録	A 4判 2ページ以内, 300~500語
本論文	A 4判 4~10ページ

発表 英語, 1名あたり15分以上

抄録については, 査読や印刷の都合上, 2ページという制約が有効であるが, 印刷されない本論文についてはページ数の制限を緩和しても良かったかもしれない。

2. 広報活動の本格化

2009年5月下旬には, 金井崇委員が中心となって, ウェブサイトの開設とメーリングリストの整備が行われた。ウェブサイトのデザインは齋藤綾委員が担当した。並行して, フライヤーのデザインも進められ, 6月10日頃に印刷完了し, 同月下旬には配布を開始するとともに, PDFをウェブサイトに掲載した。また, 7月中旬からは寄付の依頼状の発送を開始したが, この中にもフライヤーを同封した。フライヤーの中国語版と韓国語版は, 2009年9月に作成された。またスケジュール変更などに併せて, 改訂版も作られ, それぞれPDFファイルや印刷体として広報活動に利用した。

3. 抄録査読

2009年8月24日に開催された実行委員会から, 学術プログラムの検討が本格化した。招待講演等についての議論も開始されたが, このときの主たる議題はウェブ登録システムであった。今回の国際会議では, 参加者向けに予備登録, 論文投稿, 参加登録の3つのシステムを提供したが, そのうちの予備登録と論文投稿のウェブシステムについて検討された。前者のシステムは三谷純委員が一から開発し, 後者のシステムは, やはり三谷純委員がフリーソフトウェアであるOpenConfを利用して実現した。なお, 予備登録システムは9月11日から稼働を始めた。予備登録システムは, 論文投稿システムや, 実際の参加登録システムとは独立であり, 国際会議の潜在的参加者のメールアドレスを集めることを目的とした。

2009年9~10月は, 論文投稿システムの整備を進めるとともに, 国際プログラム委員会の調整を行った。まず, 9月にISGG(国際図学会)の会長Ted BRANOFF氏, 副会長のOtto ROESCHEL氏とEduardo SANTOS氏とで議論を行い, 以下のことを確認した。

- ①抄録の査読は, Asia/Oceania, Europe/Africa, North/South Americaの3地域が独立に実施する。
- ②各地域のプログラム委員長は副会長が担当し, プログラム委員会を構成する。
- ③地域は著者の申告に従うものとし, 実際の勤務地などにあわせて事後調整することはない。
- ④全地域の査読結果がまとまったところで, 抄録段階での採否を調整する。

⑤本論文の査読と最終的な採否の決定は, 日本のプログラム委員会が担当する。

③は著者の間違いであれ, 意図的であれ, その申告に従うもので, プログラム委員長間で論文の受渡しは行わないことを意味している。これによって, 調整に伴う作業量を減らせるものと考えた。また3名のプログラム委員長は, 自分とは異なる地域へ投稿することで, 査読の公平性を担保できるという側面もある。

2009年10月には, 三谷純委員によって, 論文投稿システムの調整が精力的に進められた。この作業には, 16 bugs.comというバグトラッキングのウェブシステムを用いた。システムの利用方法の解析, 作業シナリオの設計, システムのカスタマイズなどを, 反復的に実施して利用環境の整備を図った。論文投稿は, 上述のように地域ごとに進められるため, 地域ごとにほぼ同じ3つのシステムを独立並行に立ち上げ, 11月5日から実運用が開始された。なお後日, ポスターセッション用のシステムも立ち上げることになり, 最終的には4つのシステムが並列運用されることになった。

論文投稿システムの稼働開始直前の10月30日に, 査読プロセスに関して再検討が行われた。この頃までに, クリスマスや年末・年始休暇などの関係で, 世界各地から抄録の提出メ切について多数の問合せがあったためである。その結果, 査読スケジュールを次のように変更することとした。

2009年12月31日	予備登録メ切
2010年1月5日	抄録メ切
2010年2月15日	採択通知
2010年4月30日	本論文メ切

プログラム委員の編成は, 2009年12月から2010年1月にかけて進められた。最終的なプログラム委員会の構成は, 表1のようになった。

抄録は, 30ヶ国から投稿され, 合計215篇であった。投稿システムごとでは, Asia/Oceania地域が116篇, Europe/Africa地域が79篇, North/South America地域が20篇であったが, 前述のように著者が必ずしも当該地域に属しているわけではないので, あくまでも参考程度に考えていただきたい。抄録はPDFファイルを投稿システムにアップロードしてもらったが, 添付メールを送信してきたり, DOCファイルを提出したりするものも多かった。特にこの段階では, カメラレディ用のテンプレートと大幅に形式の異なるものも多く, 最終論文のフォーマット統一に不安を抱かせた。地域ごとに若干のズレはあったが, 査読は1月11日頃から進められ, 採択通知は2月12日頃から著者に送付された。なお中国から

表1 プログラム委員会の構成

プログラム委員長		
Otto ROESCHEL	Eduardo SANTOS	Yasushi YAMAGUCHI
プログラム委員		
Hirokazu ABE	Naomi ANDO	Liang Yee CHENG
Sande GAO	Anton GFRERRER	Georg GLAESER
Sonja GORJANC	Baoling HAN	Naohiko HAYATA
Miklos HOFFMANN	Manfred HUSTY	Kiichiro KAJIYAMA
Takashi KANAI	Michio KATO	Kunio KONDO
Johann LANG	Cornelie LEOPOLD	Koichi MATSUDA
Jun MITANI	Shinobu NAGASHIMA	Nobuhide NAO
Yasushi NIITSU	Masatoshi NIIZEKI	Boris ODEHNAL
Martin PETERNELL	Hiroshi SAKUTA	Albert SCHMID-KIRSCH
Hans-Peter SCHROECKER	Kumiko SHIINA	Hellmuth STACHEL
Hiromasa SUZUKI	Hirohisa SUZUKI	Ichiro TANAKA
Bing-shu TONG	Emiko TSUTSUMI	Gunter WEISS
Kensuke YASUFUKU	Yayoi YOKOYAMA	Yurika YOKOYAMA

の論文に関しては、中国図学会の Bingshu TONG 委員と Baoling HAN 委員の意見が大変参考になった。また Asia/Oceania 地域の査読結果のとりまとめにあたっては、新関雅俊委員に多大な協力をいただいた。

4. ポスターセッションの設置

2010年1月に投稿受付を終了した時点で、投稿された抄録が会議での発表可能数をオーバーしたことから、採択されない論文が多数出ることが確定的になった。また、投稿受付終了後に、抄録の提出に関する問合せも複数あった。そこで、急遽、ポスターセッションの開催を検討し、2月3日の実行委員会でポスターセッションの実施を決定した。以降、講演発表をテクニカルセッションと呼び、ポスター発表と区別する。また、講演発表とポスター発表の差を明確にするために、ポスター発表については、以下のようにすることとした。

- ①ポスター発表には本論文はなく、抄録のみとする。
- ②抄録は、印刷体/DVD プロシーディングスともに掲載する。
- ③ポスターは本人が会場に持参する。
- ④ポスター発表者は短時間（1分半程度）の口頭発表を行う（この短時間発表の実施については、4月の委員会で決定された）。

なお④の短時間発表は、Gunter WEISS 氏の提案によるもので、実際には4月の実行委員会で実施が決定された。ポスターセッションを取りまとめられた安藤直見委員の適切な運営もあり、会議の参加者からは概ね好評を得られた。

ポスターセッションの発表募集は、テクニカルセッションの採録通知と並行してアナウンスされた。ポスター発表のための抄録査読等に関する日程は、以下のよう定められた。

2010年3月31日	抄録〆切
2010年4月15日	採択通知
2010年5月15日	最終抄録〆切

このときにテクニカルセッションの本論文〆切日も5月10日に変更された。なお、ポスターセッションの抄録査読については、主に鈴木広隆実行委員長に担当していただいた。ポスターセッションへの投稿は35篇あったが、そのうちテクニカルセッションとの差異がわからずに、両方に投稿していたものが6篇ほどあった。後からアナウンスしたために、混乱したのかもしれない。

5. 招待講演

抄録の査読作業と並行して、招待講演の発表者の選定・依頼作業が本格化した。比較的初期に決定したのは、日本の発表者で、理論的な観点から京都大学の宮崎興二氏、工学（機械）的な観点から首都大学東京の山下敏男氏、美術的な観点から東京藝術大学の籾内佐斗司氏にお願いすることが決まった。また、国際図学会の副会長に各地域の候補者を検討していただき、理論的な側面から Innsbruck 大学の Hans-Peter SCHROECKER 氏、工学（建築）応用として Purdue 大学の Clark CORY 氏を推薦してもらった。さらに日本図学会関係者の紹介で、理論面から Butapest 工科大学の Tibor TARNAI 氏、図学教育関連で Laos 国立大学の Soukanh CHITHPANYA 氏の講演が決まった。全体プログラムの都合から、宮崎興二氏の講演は会議前日のウェルカム講演を担当いただき、それ以外の6つの講演を基調講演として会議開催日の最初の時間帯に配置した。残念ながら Soukanh CHITHPANYA 氏は、その後、体調を崩されてしまい、国際会議での発表が叶わなかった。

6. 作業体制の充実

テクニカルセッションの抄録査読のころから、メールによる問合せと回答のやりとりが急速に増えてきた。たとえば、2010年度の上半期で info@icgg2010.org 宛のメールは約3000件、admin@icgg2010.org と finance@icgg2010.org 宛のメールはそれぞれ約1000件、査読などで個別に連絡したメールも相当数になっていた。単純に平均しても1日に30件以上のメールを処理していたことになる。これと並行して、プログラムに関しても

多くの作業を担っていた鈴木広隆実行委員長の作業量が爆発的に増えてきた。特にビザや出張手続きなどのための文書作成依頼、参加登録や参加費支払いに関する問合せなどが殺到した。また会場関連の作業も本格化してきた。一方で、本論文ならびに最終抄録の投稿受付に向けて、作業量の増加が見込まれており、プログラム委員会の体制見直しが必要になった。

まず、テクニカルセッションの本論文の最終確認と採否決定は、すべて日本のプログラム委員会で対応する必要がある。Asia/Oceania 地域の前半を三谷純委員、Asia/Oceania 地域後半と North/South America 地域を金井崇委員、Europe/Africa 地域を山口が担当することとした。また、新たに設置の決まったポスターセッションの最終原稿受付と短時間発表の運営など、ポスターセッションの一切を安藤直見委員に一任することになった。突然発生したポスターセッションに関する作業をすべて無事処理していただいた安藤直見委員には非常に感謝している。また、本論文のフォーマットや各種の英文公式文書の作成は田中一郎委員に担当いただいた。

2010年2月頃に、中国図学会から国際図学会の会員として、比較的柔軟なグループ会員の提案があり、国際図学会理事会での議論と中国側との調整が図られた。さらに、ビザや出張のための公式文書の作成依頼、支払い方法に関する問合せなど、日本に次いで参加者の多かった中国との連絡が非常に頻繁になってきた。この連絡には、ほとんどすべて高三徳委員に窓口を担当していただいた。中国からの参加者に関して、処理がスムーズに進められたのは、高三徳委員の貢献が大きかった。

7. 本論文／最終抄録の受付

前にも書いたように、テクニカルセッションの本論文メ切は5月10日、ポスターセッションの最終抄録メ切は5月15日であったが、実際の受付には、さらに時間がかかった。論文投稿システムのOpenConfの仕様上、単一のファイルしかアップロードできないため、本論文と最終抄録、著作権譲渡書をZIP形式でまとめて、アップロードしてもらった。しかし、その方法がわからないという人も少なからずいた。またアップロードされたファイルが不完全であったり、内容面や体裁面で不具合があったりして、修正を必要とするものが半数近くあったように思う。10回前後のやりとりを経てようやく完成版が揃うというケースも複数あった。中国を除くと多くの外国人参加者がいた Europe/Africa 地域の連絡にあたっては、Gunter WEISS 氏と Luigi COCCHIARELLA 氏に、大変お世話になった。

2010年5月27日に本論文と最終抄録の受付状況を確認するとともに、プロシーディングスについての相談を行った。参加者は最終原稿の受付を担当した安藤直見委員、金井崇委員、三谷純委員、山口の4名に加えて、プロシーディングス作成の観点から齋藤綾委員、鈴木広隆実行委員長、堤江美子委員が参加した。ここで、最終原稿の完成度について受付担当者の意思を統一し、最終原稿の採否基準を確定した。この際、発表時間を1名当たり20分とし、テクニカルセッションの講演発表を概ね150件以内とすることにした。当初の予定では、この段階で学術プログラムを確定し、座長の配置を決めたいと考えていたが、原稿回収が不完全であったため、6月中旬に、再度プログラム委員会を開催することとした。また、プロシーディングスの入稿について確認を行った。印刷体の入稿メ切が7月10日、DVDデータの入稿メ切が7月20日ということで、プロシーディングスに掲載する挨拶文や Steve M. Slaby 賞の紹介文などの依頼を行うことにした。

前の会合を受けて、6月17日にプログラム委員会としての最後の会合を行った。ここでプロシーディングスへの掲載論文を確定し、学術プログラムを確定した。ウェルカム講演1篇、基調講演6篇（うち1篇は講演者の体調不良で掲載を取りやめた）、テクニカルセッションの講演論文146篇、ポスターセッションの最終抄録28篇とした。プロシーディングスへの掲載は、参加費の支払いと会議への参加を前提としていたが、その条件を事前に確認することは困難であり判断に苦勞した。当日になって会場に来たものの、プロシーディングスに論文が掲載されていないとなると、取り返しがつかないことから、安全側に見積もることとした。実際には、テクニカルセッションの講演論文で6篇（論文番号111, 120, 133, 167, 169, 234）、ポスターセッションの最終抄録で4篇（論文番号313, 318, 319, 328）は条件が満たされなかったことは非常に遺憾である。なお、判断に迷ったものの中にも、後から条件が満たされたという事例もあるので、安全側の対応をしておいて良かったとは思っている。参考として、表2に参加者と論文に関して、国別にまとめたものを掲げる。テクニカルセッションの講演論文に関して言えば、抄録査読時に投稿された215篇から最終的には140篇にまで絞られたことになる。

プログラム編成の活動として、最終原稿の確認、座長の配置、ポスター発表の案内や発表資料のとりまとめなどが残されていたが、この後は委員会として集まることはなく、ネットワーク上での作業が中心となった。このころから、各種の情報整理のために、Google

表2 参加者ならびに論文等の国別内訳

表中の登録者ならびに参加者は、同伴者以外の会議参加を目的とした者を数えている。論文には講演発表論文以外に招待講演やポスター発表も含んでいる。プロシーディングスに掲載された論文の中には最終的に条件を満たさなかったものもあり、正式に採択された論文は合計170篇となる。なお論文の国名は論文中の第一著者のものであり、「日本」の中には日本在住の研究者や留学生8名（インドネシア、韓国、スリランカ、タイ、中国、ペルーなど）も含まれる。また発表論文の中には代理発表されたものも含まれている。

	登録者	参加者	同伴者	掲載論文	採択論文	発表論文
日本	103	103	3	76	76	75
中国	31	28	1	27	23	21
イタリア	13	10	2	16	12	10
オーストリア	10	10	2	9	9	9
アメリカ	7	7	4	6	6	6
ドイツ	7	7	4	8	8	8
台湾	5	5		2	2	1
スペイン	4	4	1	4	4	4
クロアチア	3	3		2	2	2
ポーランド	3	3	1	3	3	3
ラトビア	3	3	1	3	3	3
ハンガリー	3	2		3	3	2
エジプト	2	2		2	2	2
ブラジル	2	2		2	2	2
イスラエル	1	1		1	1	1
ウクライナ	1	1		2	1	1
オーストラリア	1	1	2			
カザフスタン	1	1		1	1	1
カナダ	1	1		1	1	1
スロバキア	1	1	2	1	1	1
チェコ	1	1		2	2	2
メキシコ	1	1		1	1	1
ロシア	1	1		2	1	1
アルゼンチン	1			1	1	1
コソボ	1			1	1	
ジンバブエ	1					
セルビア	1			3	3	3
エストニア				1	1	1
	209	198	23	180	170	162

Spreadsheet を利用し始めた。全原稿について、著者名、タイトル、ページ数、連絡先、登録状況などを一元管理した。また各セッションの座長割付などにも、Spreadsheet を利用した。さらに金井崇委員が Spreadsheet のデータから、学術プログラムの表やタイトル・著者名の一覧を自動生成できるようにした。ギリギリまでプログラムの変更などがあったが、これに無事対応できたのも、このシステムがあったおかげだと考えている。

8. プロシーディングス作成

プロシーディングスのデザインは齋藤綾委員が担当し、6月中旬頃から作業を進めていた。しかし、最終原

稿の回収がズレ込んだことなどもあり、プロシーディングスの編集作業が思ったように進捗していなかった。限られた時間内で作業を円滑に進めるためには、プログラム委員が中心となってプロシーディングスの編集作業を行う方が良かろうと判断された。そこで、7月初頭からDVDの編集は金井崇委員、印刷体の編集は山口、両方について特にデザイン面で齋藤綾委員をそれぞれ主担当とすることにした。さらに校正などの作業には、田中一郎委員、堤江美子委員、面出和子委員、横山ゆりか委員にご協力いただいた。オフラインの編集委員会はこの時期に3回ほど開催されている。プログラムの最終編成や座長の割付・依頼を完了したのは、この時期であったが、実際には発表者や座長の変更は国際会議の当日まで

続いた。

会議開催1ヶ月前になって、最終プログラムを掲載する小冊子の必要性が初めて認識され、当該小冊子の作成も並行して進められることになった。この小冊子については、もう少し早い時期から準備すべきであったと思う。たとえば、プログラムは印刷体プロシーディングスの版下をそのまま流用したが、B5判のプロシーディングスを想定して目一杯詰め込むようにしていたため、A5判の小冊子ではかなり文字が小さくなってしまった。また、社交行事務用の写真素材や会場までの案内図なども、この時期に収集することになった。特に案内図に関しては、京都大学のウェブページに、あまり適当なもの存在せず、安福健祐委員に多くの図面作成をお願いすることになった。これらの図面は非常に分かり易くかつ美しい秀逸な出来映えであった。デザイン面での完成度の高さは齋藤綾委員のセンスによるところが大きいが、面出和子委員の適切な助言にも大変助けられた。

著者からは最終原稿をPDFで提出してもらったが、主にフォントの関係で苦勞が絶えなかった。特に、細かな修正をしたり、ヘッダをつけたりすると全体の配置が狂ってしまうという問題などもあり、電算印刷さんには随分助けていただいた。DVDデータの最終版は7月23日、印刷体の校了は7月26日に済ませ、プロシーディングス作成作業は終結した。ちなみに、印刷体ならびにDVDプロシーディングスは300部、最終プログラムを掲載した小冊子は350部を作成した。

ところが7月29日になって、ISBN番号の間違いが判明した。日本図学会では2001年の日中図学教育研究会議のプロシーディングス発行のためにISBN番号を取得していた。2001年当時のISBN番号は10桁であったが、2006年から13桁の番号が利用されるようになっていた。それに気づかずに10桁の番号を作成していたのが、間違いの原因である。印刷体の裏表紙にISBN番号とJAN番号が印刷されるが、裏表紙印刷の際に間違いが発見された。実際の影響は多大で、印刷体の裏表紙だけでなく、著作権表示部分やDVDの表面、DVDジャケット、すべての本論文と最終抄録のヘッダなどにISBN番号が記載されており、これらの修正が必要となった。これについても電算印刷さんで素早く対応していただき、会議の本番に間に合わせることができた。しかし、DVDだけは納品が8月7日となってしまい、参加登録キットにDVDを入れることができなかった。代わりにDVD引換券を入れて、7日から交換することにした。参加者の中には8月6日で帰られたり、引き換え忘れていたりした人もいて、後日郵送することになった。

9. プロシーディングス発送

国際会議終了後に残されたプロシーディングスの発送がプログラム委員会関連の最後の作業となった。引換え損なったDVDの発送に先駆けて、椎名久美子委員に引換証の確認をしていただいた。その上で、引き換えそびれたと予想される著者に問合せを行い、必要との回答を得たところにDVDを送付した。自業自得であるが、ISBN番号の間違いさえなければ、不要な作業であった。

また、国際会議開催にあたって協力をいただいた関係各所に会議実施の簡単な報告と、プロシーディングス一式を送付した。主な送付先は、参加登録と参加費納入を済ませながら参加できなかった方々、開催にあたって助成をいただいた大阪電気通信大学と栢森情報科学振興財団、寄付をいただいた各団体、協賛していただいた学協会、展示協力いただいた企業、関連の国外学会、図学研究を定期購読している図書館などである。この発送作業は9月14日をもって終了した。2010年11月現在、日本図学会事務局内に、日本図学会と国際図学会分として合計14セットが残されている。

10. おわりに

第14回国学国際会議の実施にあたって、プログラム委員会の活動は、多くの方々に支えられて完遂できた。ここで改めてお名前を挙げることはしないが、上記の様々な場面で多大なご協力をいただけたことは誠に幸いだった。本当にありがとうございました。

通帳とにらめっこの日々

椎名 久美子 (大学入試センター)

ICGG2010の組織委員会と実行委員会が発足して、何をするにもまずお金ということで、2009年5月に銀行口座を開きました。開設にあたっては、不正口座でないことを銀行に証明する必要がありましたが、図学研究43巻1号(2009年3月号)の巻頭言にICGG2010の開催が明記されていたおかげで、なんとか信じてもらえました。2009年9月には関西にも口座を開設し、榊実行委員に管理していただきました。

当面必要な運転資金は図学会からお借りして、ドメインやサーバの料金、フライヤーの印刷代などにあてましたが、2009年7月からは図学会会員や企業からの寄付が集まり始めました。寄付の連絡がメールやFAXで届いたらATMで記帳して、ある程度の件数がたまったらお礼状と受領証を発送、というルーチンが大会の直前まで続き、正会員・名誉会員から64件、企業・団体(賛助会員を含む)から13件の寄付が集まりました。国際図学会(ISGG)からの開催費用や図学会からの共催費用の他に、申請した補助金が1件採択されたり、大阪電気通信大学から国際交流助成を受けたり出来たことも、非常に心強かったです。

2009年12月頃からは、会議の参加登録料の送金方法に関する海外からの問い合わせが鈴木委員長に届くようになり、クレジットカードでの支払いが困難なケースについては、メールや郵便で請求書(invoice letter)を先方に送って、銀行口座に直接送金してもらうことにしました。当初、海外からの問い合わせということで鈴木委員長が対応していましたが、2010年6月中旬からは、送金に関する書類作成や先方とのやりとりは榊委員と私で分担して行いました。海外からの送金については、それが不正な送金でないことを銀行に証明する必要があり、銀行から送金の電話連絡があったらinvoice letterの写しを銀行にFAXして、銀行の確認がとれたら入金、という手順でした。この手続きはかなりアナログで、メールでは代替不可でした。他学会の話聞いても、不正口座や不正送金でない証明は必ず求められるそうで、今回の会議および私が特別怪しまれたわけではなさそうです。

海外とのやりとりが増えるにつれて、英文でメールを書く際の感覚がだんだん麻痺してきて、多少文法が違っていても意味が通じればオッケー、と腹をくくって対応する日々でした。直接送金者に関するデータをオンライ

ンによる登録・支払いシステムと統合する方法については、日本通運の西山様に助言していただきました。中国からの参加者との連絡については、翻訳も含めて高委員に担当していただいたので、だいぶ負担が減りました。海外からの送金手数料は先方に負担してもらうことにしたのですが、そのことを強調し過ぎたためか、多く送金されてきて慌てたケースもありました。また、円建てで送金してもらうはずが、いきなり現地通貨で送金されてきたケースなど、結構イレギュラーなことも起こりました。

参加登録料の細かい過不足については現地での精算で対応しましたが、早期登録の割引、ISGGの会員割引、ISGG会員かどうかの確認なども加わり、かなり複雑なことになりました。また、当日の参加が予想より多かたり、会議の参加証明書の発行を急遽依頼されたり、期間中の受付デスク周辺はフル稼働状態でしたが、日本通運の西山様のチームや実行委員の皆様、学生アルバイト諸君の助けもあって、なんとか乗り切ることが出来ました。今回は、あまり発表を開けなかったのがちょっと残念です。

会議が終了してほっとしたのもつかの間、今度は、会場使用料や機器のレンタル料、飲食代、グッズ代、看板代などの請求が押し寄せて来ました。最初のうちは、請求書が届いた順番に脳天気払っていて、クレジットカードで支払われた参加登録料の入金が9月になることを鈴木委員長から指摘されるまで認識できていませんでした。黒字になる見込みは付いていたのですが、支払いのタイミングを考えないと通帳残高がゼロになってしまうことによるやく思い至り、以後は、請求書の支払い期限と通帳残高を考えて、支払う順番を調整しました。9月になってクレジットカード払いの参加登録料が入金した時は嬉しかったです。後回しにしていた請求書の分も、学生諸君へのアルバイト代も払うことが出来て、ようやく会議が終わった気分になりました。

Web の開設と運営、 DVD プロシーディングス作成

金井 崇 (東京大学)

現代の国際会議において、ホームページはいわばその会議の顔とも言えるものである。そのホームページの開設・運営を含む Web 関係全般の仕事を担当させていただいた。同様に担当させていただいた DVD プロシーディングスとともに、1994年の第6回東京大会では全く存在しなかった内容の仕事である。Web の利用は参加者にとっては便利で当たり前なものになったが、運営する側としてはその分負担が増えているとも言える。

まず、ホームページの開設にあたり、開設するための「場所」が必要となる。今回はその場所としてレンタルサーバーを利用することにした。2009年5月に、さくらインターネットのビジネスコース(OS:FreeBSD, ディスク容量80GB, メールアドレス無制限, ML の開設可能, MySQL データベース複数利用可能など)を25,000円/年で契約した。また会議の Web 上での名前となるドメイン名(icgg2010.org)を、1,800円/年で同日に取得した。これらは、2010年5月に1年分の更新を行った。

ML は、運営の仕事が基本的にメールベースで行われていることから大変重要な機能の一つとなっている。今回は、以下の8つの ML を作成、大いに活用された。

info@icgg2010.org ホームページ窓口用
admin@icgg2010.org 作業メンバー用
finance@icgg2010.org 財務担当メンバー用
registration@icgg2010.org pre-registration 用
venue@icgg2010.org 現地担当メンバー用
org-com@icgg2010.org 組織委員会メンバー用
exec-com@icgg2010.org 実行委員会メンバー用
preregistered@icgg2010.org pre-registration 登録メンバー用

ホームページの作成については、当初 CMS の利用も考えたが、複数の人が編集することを想定しなるべくシンプルなものが良いと考えた結果、フレームは利用したものの基本的には HTML 直書きで作成することにした。デザインの雛型を齋藤綾氏に作成していただき、それをベースに2009年9月に最初のホームページを立ち上げた。その後は少しずつ頻繁に更新していき、それが2010年8月の会議の開催日の直前まで続いた。ホームページのデータは、万が一のため、拙者の研究室にある

サーバーと1日に1度(投稿締切間際には2時間に1度)rsyncを使って同期をとるようにした。

ホームページの内容の多くは、それぞれの担当の方々が用意してくださった文章や図を、デザインに合うようにして修正する形で作成したが、一部に関してはフルスクラッチで作る必要があった。中でも最も大変だったのが Conference Program のページである。なにしろ今回はオーラルセッション、ポスターセッション、招待講演含めて180件近くの発表があり、セッション名、時間、座長、タイトル、著者名、著者所属を記載する必要がある。しかも、会議の開始日の直前まで頻繁に変更があることを考慮しなければならない。プログラムの内容に関しては、プログラム委員会が作成した Google Spreadsheet の表データに逐次まとめられていたので、その表データをテキストデータに変換したものを直接 HTML に(ほぼ)自動的に変換するための Perl のコードを自作した。これにより、表データの変更に対しては即座にホームページに反映することができるようになった。

DVD プロシーディングスに関しては、時間が限られていたこともあり、ホームページ上のコンテンツをベースにして作られることとなった。中でも大変だったのが、Conference Program, Papers List, Author Index の作成と、PDF のファイル名の変更であったが、これらはすべて前述の Perl の自作コードに対する機能の追加・修正で乗り切った。

今回行った作業が、次回の国際会議の運営で何らかの形で役立てば嬉しいことである。ただし、その頃には Web とは全く異なる方法が主流になっているかも知れない。果してどのようになっているだろうか。

予備登録システムと 論文投稿システムの構築

三谷 純 (筑波大学)

私自身は前回に日本で国際図学会の運営が行われたときの様子を知りませんが、当時と今回で最も異なる点の1つに、インターネットを使用した予備登録システムおよび論文投稿システムの存在が挙げられるのではないかと思います。前は電子的な論文投稿のシステムが存在せず、すべて紙ベースで行っていたと聞いていますので、そのときの労力たるや、大変なものがあったことでしょう。幸い現在ではレンタルサーバーを安価に運用することができ、また無料で使用できる論文投稿システムも存在します。今回はこれらを活用して、論文原稿の収集および査読手続きなどをインターネット上で行いました。とは言っても、私にはこのような経験が豊富にあるわけではなく、試行錯誤の連続でした。

まず、レンタルサーバーの選定から入ったわけですが、今回は国内でよく知られていて、CGIやデータベースなどを柔軟に使用できる「さくらインターネット」に契約しました。ドメイン名のicgg2010.orgの取得も行いました。予備登録システムは、PHP言語を使用して自前で開発を行いました。幸い、過去にさくらインターネットのサーバー上でPHP言語を使った開発の経験があり、使い勝手を知っていたのでトラブルはありませんでした。

論文登録システムには、オープンソースであり無料で使用できるOpenConf (<http://www.openconf.com/>)を採用しました。他にもEasyChair (<http://www.easychair.org/>)なども候補にありましたが、カスタマイズやインストールの容易性などからOpenConfを採用しました。PHPとMySQLを使用するシステムであり、さくらインターネットのサーバー上で問題なく動作しました。しかし今回は、3つの地域ごとに投稿をわけ、その地域ごとに査読をすることとしたため、結局、論文投稿システムを3つインストールし、それぞれを独立して運用することとしました。また、今回の学会に固有の対応も必要となり、かなりの量のカスタマイズ作業が発生しました。OpenConfのシステムが非常にわかりやすくできていたため、幸いにもどうにか各種のニーズに対応することができました。

私はシステムをオープンするまでの実作業を担当いたしました。その後の運営では山口泰先生に多大なるご協力をいただきました。また、さくらインターネットとの契約やドメインの取得などは金井崇先生にいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

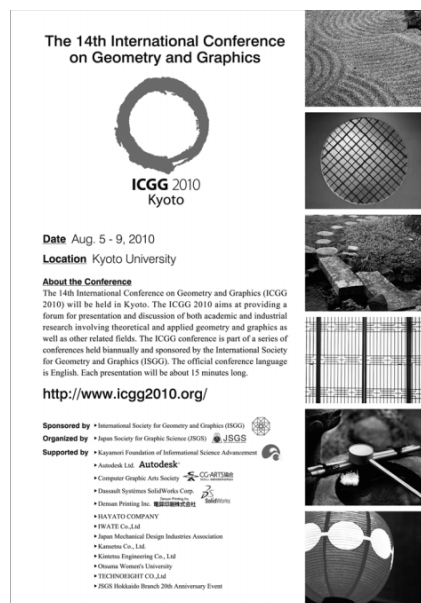
デザイン備忘録—ロゴマーク/フライヤー/Web /プロシーディングス冊子/DVD/プログラム小冊子

齋藤 綾 (女子美術大学)

今回、ロゴマークと印刷物のデザインを手がけました。作業量としてはかなり多くなりましたが、デザインコンセプトを統一させるために、印刷関係全体に関わるのが大切だと考えました。



ICGG2010開催日の約1年半前、ロゴマークをデザインすることからすべてははじまりました。データを見ると、2009年4月中旬に第1案を作成しています。それから約1ヶ月ほどかけてデザインを詰め、最終案が決まりました。面出先生からもロゴマークについての紹介がありますが、《円相》がテーマとなっています。京都は水の文化が発達していることや、夏は暑さが厳しいことから、涼しげなブルーをメインカラーとして選びました。ただ、この色は印刷媒体によって明度や色相の変化が大きく、その点は今後に生かして行ければと思います。



次に作成したのは、フライヤー（判型：A4, 4 C/1 C）です。第1版は2009年6月に入稿しています。幾何形体をイメージさせる京都の写真をえらび、学会のフライヤーらしくシンプルにまとめました。洋4サイズの封筒と、大きな封筒などに対応できるようにとシールも作成しました。それらは10月に入稿しています。フライヤー第2版は協賛団体を掲載し、同年12月に入稿しています。また、封筒に入れて発送することをふまえ、第2版からは三つ折り対応にしました。その後掲載団体の増加や、申し込み締切りなどの重要日時の決定に伴い、フライヤーを更新したものをPDFに変換し、WEB上にアップロードすることで対応していきました。

フライヤー第1版の作成後、すぐにWEBサイトのデザインにとりかかりました。全体のイメージはフライヤーから踏襲し、雛形を作りました。HTMLコーディングと更新は、金井さんが担当してくださいました。それまで仮に稼動していたWEBサイトと差し替えての公開は、ちょうど開催1年前の8月頃です。実行委員会会議でいよいよ1年後だねと会話したのを覚えています。



最も大変だったのは、プログラム決定後です（プログラム決定の作業も、はたから見ていて本当に大変そうでした）。開催日に配布するプロシーディングス冊子（判型：B5, 1 C, 表紙2 C, PP マットコート）、DVD（判型：1 C, パッケージ表紙4 C）、プログラム小冊子（判型：A5, 4 C, 中綴じ16ページ）をほぼ同時進行で制作しなければなりません。5-6時間にわたるミーティング、膨大なメール数、怒涛の進行でした。それらはまとめて2010年7月中旬頃の入稿でした。

プロシーディングスで主に私がデザインしたのは前半ページで、後半ページ（論文やアブストラクト部分）の作業は電算印刷さんにお任せしています。膨大な校正や度重なるアクシデントに対応してくださいました電算印刷さん、担当の高山さんに深くお礼申し上げます。また、あまりの作業量に細かい部分の見落としが多くなってしま

い、校正作業を行ってくださった山口副委員長には大変ご迷惑をおかけしました、またありがとうございます。広く全体から見てのアドバイスをしてくださった堤会長をはじめ、デザインのアドバイスをしてくださった面出先生、お忙しいところ必ず何らかのコメントをしてくださった鈴木委員長、実行委員のみなさま、どうもありがとうございました。

今回、これまでデザイナーとしてはノータッチだった編集作業に関わったことは、私にとって大きな経験となりました。内容の組み立て、ページの割り振りなど、印刷物をはじめから作る、ということはこういうことなのだということが分かった気がします。素人作業で至らない部分もあったかもしれませんが、全体に関わることで得たものは大きかったと信じております。

はじめての国際会議参加でしたが、無事に終わったあとは本当に感無量でした。

ポスターセッションの管理と運営

安藤 直見 (法政大学)

ポスターセッションには、12カ国から28編の応募があった^{注1)}。

8月6日(金)の午後から8月8日(日)午前をポスターの展示期間とし、8月6日(金)には、ショートプレゼンテーション(口頭発表)とディスカッション(ポスター展示会場での討議)を行った。

ショートプレゼンテーション(写真1)では、50分の間に、各発表者に90秒間での口頭説明をしてもらった。発表をスムーズに進めるため、発表者には事前にパワーポイントまたは画像を提出してもらい、主催者側で、発表時に全発表者の資料が途切れることなく自動再生されるように準備をした。発表者には、90秒間でのショートプレゼンテーションとなることから、パワーポイントのスライドまたは画像の総数は6枚までとすることを要請した(6枚の場合、1枚あたりの表示時間は15秒)。



写真1 ショートプレゼンテーションの会場

多人数が集まれる会場で行ったショートプレゼンテーションの後、ポスターの展示会場に場所を移し、発表者とのディスカッションを行ってもらった(写真2)。この間は比較的狭いポスターの展示会場に多くの人が集まり、活気のあるディスカッションが展開した。ディスカッションの時間としては40分間を設定していたが、40分を過ぎても熱心な討議が続いていた。

ポスターの展示会場は、10×8.5メートルの部屋に、図1に示したようにパネルをレイアウトした。このレイアウトで、案内と発表リストを含め、最大33枚のポスターを展示できる。

各パネルは、幅90×高さ210センチの大きさである。発表者にはこのパネル1枚を使ってポスターを展示してもらった。図2に示したように、各パネルの最上部の高さ10センチの範囲には、タイトルと発表者名を、主催者



写真2 発表者とのディスカッション会場

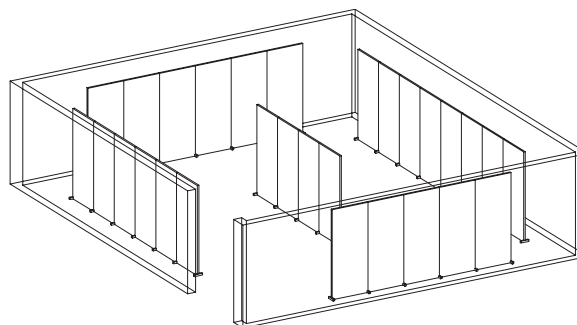


図1 パネルレイアウト

側で掲示するようにした。A1サイズ(幅594×高さ841ミリ)のポスターを縦長に掲示してくれることを推奨したが、パネル1枚の範囲では、その他の自由な掲示も可とした。

ポスターセッションには、発表内容を大きくビジュアルに示し、その前で発表者との自由討議が行えるという

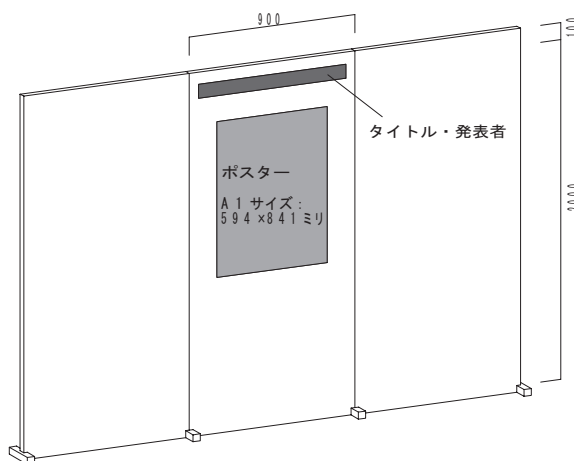


図2 パネル

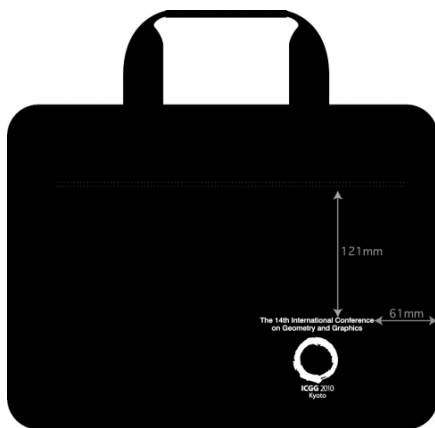
点で、ユニークな研究発表の機会である。ICGG2010のポスターセッションは、当初の発表募集時には予定されておらず、応募者の要望に基づいて急遽設定されたものだった。今後の国際会議では、ポスターセッションが定着してもいいのではないかと思う。

注1) 内訳は、日本(9)、イタリア(5)、セルビア(3)、
ウクライナ(2)、ポーランド(2)、コソボ、中国、
チェコ、ドイツ、メキシコ、ラトビア、ロシア
()内は複数の応募があった場合の応募数)

カンファレンスグッズの 選定と位置付けについて

吉田 晴行 (大阪電気通信大学)

ICGG2010関西 TG での主な担当業務は、カンファレンスグッズの選定であり、2010年3月初旬より具体的な手続きに取り組んだ。会議参加者対象グッズに関しては、一般の国際会議と同様にカンファレンスバッグ、ボールペン、A4レポート冊子、ネームカード、カードホルダーの組を基本構成として採用した。参加者1名あたりのグッズ費用の上限を1,500 [円/名] とし構成内容を調整する方策では、シンプルな構造・比較的生地の高価なPCクッションバッグをカンファレンスバッグとして選定し、本国際会議ロゴを印字する手段をとった(図1(a))。その結果1,440 [円/名] まで検討するに至った。京都観光マップ・レストランガイド等の観光資料に関しては、会議実施日1ヶ月前に(財)京都文化交流コンベンションビューローへ申請することで必要部数250部をご提供頂いた。次に、参加者誘導業務の円滑化を図る趣旨より、会場STAFFを対象にロゴ入りポロシャツを製作した(図1(b))。これらのカンファレンスグッズは全て、仲介を通さず同一の業者に依頼する手続きをとったが、その結果、予算配分がスムーズに取り扱われたものと判断される。おわりに、ロゴ入りポロシャツについて参加者より購入したいとの申し出があった。図形科学に関する国際会議として、会議を象徴するロゴの印字されたグッズの販売は、今後、お土産として検討してゆくことも課題の一つに挙げられる。



(a) カンファレンスバッグ



(b) STAFF ポロシャツ

図1 : ICGG2010カンファレンスグッズ製作例 (ご提供 : (株) 日報印刷)

エクスカーションと バンケットについて

飯田 尚紀 (産業技術短期大学)

選定について

エクスカーションとバンケットは、2009年6月20日(土)に開催された第14回図学国際会議京都大会運営補助取扱業者選定会議を経て決定された日通旅行と打ち合わせの上、決定した。

エクスカーションでは、京都市内を中心に奈良方面への行程も検討されたが、盛夏の時期に開催されることや移動時間など考慮し、京都市内の著名な清水寺を中心とした行程を検討することにした。また、開催地である京都を「体験」でき、また、「おもてなしの心」を表現できる見学地を検討した結果、日本の古典芸能である「能」を見学・体験できる場所として、「大江能楽堂」を見学地として選定した。また、数回の下見を経て、京都大学→大江能楽堂→清水寺のコースを決定した。

バンケットは、清水寺での拝観を終了したのちに行うこととし、会場の選定を行った。候補として、京都市内のホテルの宴会場で行う案とガーデンオリエンタル京都で行う案など複数の検討を行った。

京都が、「日本の心」かつ、「おもてなしの心」を表現する場所であることから、京都市内のホテルの宴会場でのバンケットでは、その意図を表現しにくいのではないかと、という意見から、会場となったガーデンオリエンタル京都をバンケット会場に選定した。

会場には日本庭園が整備されており、宴会場からは京都の山々や塔などを見ることができ、時期的にライトアップされた景色は、京都らしい風情を演出していた。また、バンケット会場と清水寺は、徒歩で移動可能な距離であり、その移動途中には、三年坂などの観光スポットがあることも、選定の大きなポイントになった。

バンケットのメニューは、複数回の視察を経て、和洋の両方の味が味わえるメニューとした。

実施結果

エクスカーション

大江能楽堂での英語の通訳が聞き取りにくい点もあったが、英語のパンフレットが準備されていた点がよかった。また、能舞台に上がれて能面をつける体験もできたので、日本文化を体験することができ、概ね好評であった。

清水寺では、地図を配布し、経路途中で学生スタッフ

を配置したので、無事に散策～バンケット会場到着につながった。

バンケット

2部屋を用いたが、一体感をもって実行できたと感じた。また、味は概ね好評であったが、配食に時間がかかり、後半に料理が多く出てきたのが残念であった。ステージでは、多くの方々によるパフォーマンスが実施され、充実したバンケットであったと感じた。

最後に

エクスカーション、バンケットとも、参加者各位のご協力をえて、盛会となりました。ここに、御礼を申し上げます。

同伴者ツアー報告

木多 彩子・榎 愛 (摂南大学)

会議の2日目(8/6), 3日目(8/7)の午後に2回行われた同伴者ツアーについて報告します。

プログラムの作成や準備については木多委員が担当しました。京都という場所柄, 和菓子作り体験, 書道体験, 禅体験などさまざまな体験プログラムがあるにも関わらず, 今回はお盆前という時期の影響で, 時間や人数についての柔軟な対応を断られることがあり, 手配が難航しました。苦勞の甲斐があって, 真夏の暑い中, 多くの方々にご参加いただき, 無事終了することができました。

当日は, ICGG スタッフ2名, 1日目のみボランティアガイド(1名)をお願いして対応しました。



同伴者ツアーに参加された方々

■1日目(8/6)

1日目は, 和菓子作り体験と錦市場散策を行いました。事前予約制にも関わらず, 予約のない当日参加希望者が多く集まってしまうというアクシデントがありました。急遽和菓子作り体験の人数とタクシー台数を変更し, 希望者全員に体験して頂くことができました。結果的には, 当初よりも多くの方に体験して頂くことができ, 大変有意義なツアーとなりました。

参加人数は21名(スタッフを含む)で, まず和菓子作りを体験した後, タクシーで錦市場へ移動し, 各自ショッピングなどを楽しみました。

○和菓子作り体験

場所: 亀屋良長(京都市下京区四条堀川東入ル)

時間・料金: 70分・2,100円/人

内容: 2種類の和菓子を各2個ずつ作る。作ったものを持ち帰ることができる

○錦市場散策

大丸前でタクシーを下車し, 錦市場の入口へ移動。集合場所(市場をまっすぐに歩き, 突き当りにある錦天満宮)と集合時間の説明をした後, 自由行動とした。



和菓子作り体験の様子

■2日目(8/7)

2日目は禅体験を行いました。参加人数は17名(スタッフを含む)で, 1日目と同じくタクシーで移動しました。副住職は英語が堪能で, 副住職自らが参加者に英語でご説明くださいました。

○禅体験

場所: 春光院(京都市右京区花園妙心寺町42)

時間・料金: 90分・2000円

内容: 座禅を体験した後, 国の重要文化財である「南蛮寺の鐘」や狩野永岳による金襴絵, 美術品, 庭についてご説明くださり, 見学。最後に, お抹茶とお菓子を頂いた。



禅体験の様子

会場運営全体と学生スタッフ管理

阿部 浩和 (大阪大学)

京都の夏は暑いものだとは分かっていたが、連日の晴天でますます気温が上がったようだ。会場が京都大学での開催ということもあり、勝手にわからない中での会場運営であったが学生諸君、多くの会員やスタッフ方々の協力によって無事に開催できたことを感謝したい。

今回、運営側を担当して最も良かった点は、これまでは参加者側で出席していたので、講演の合間に観光を兼ねて市内見学などに勤しむことが多かった？が、今回は5日間の全日を、しかも早朝から晩まで終日会場で過ごしたことで、今までに参加した会議の主催者側の苦労が身にしみてよくわかったことであった。5日間の会場運営を振り返ってみると、初日は設営と参加キットの作成で150セットを図学会の総会までに完成させる仕事があった以上に大変であった。ここでは吉田(晴)先生の段取りが良く順調に作業が進んだ点が大きかった。総会後のレジストレーションも予想に反して初日から盛況だったため、急遽空調の効かないホールロビーでの受付となってしまった。椎名先生、榊先生をはじめ学生の皆さんご苦労さまでした。その後の歓迎パーティも超満員だった。しかし初日からこれほどまでの参加者が来るのは今までになかったような気がする。2日目は開会式で予行演習ができなかったのでいきなりのスタートになった。安福先生や学生の対応も良く、何とか切り抜けることができた。続いてはレクチャーで、会場の模様替えの時間が10分という中で、机と椅子の配置を宴会形式からスクール形式に変更しつつ、プロジェクターとマイクの調節を完了させるという場面も多くあり、学生達も大忙しといった状況であった。3日目はようやく会場の使い方にも慣れ、終日レクチャーが続くので会場運営としては一段落であるが、学生の中には論文発表の準備で忙しいものもいた。4日目は待ちに待ったエクスカージョンで学生達は5台のバスに5つの班に分かれて誘導や人数確認などを行った。5日目は閉会式、後片付けであるが、机と椅子の数が足りないとか、マイクのコードが見つからないなど、結局夕方までかかってしまった。

このように大変苦労の多かった5日間であったが、海外からの多くの参加者と交流ができ、参加した学生達も「楽しかった」「アットホームな感じが良かった」などの感想があり、図学やCGなどへ関心も高まったことは大層有意義な機会であったと感じている。

会場運営

安福 健祐 (大阪大学)

会場運営は、会場が京都大学の百周年時計台記念館ということで、関西支部の先生方および学生アルバイトスタッフを中心に行われました。しかしメインのスタッフに京都大学の人がいなかったこともあって、慣れない会場で臨機応変に対応する必要がありました。特に開会式、閉会式、プレナリーセッションの一部が行われた百周年記念ホールは、当日の準備時間が短かった上に、AV機器、照明機器の操作システムが複雑だったことから、細かなミスが起こってしまいました。ただこのような事態はある程度予測できており、その事態を回避することは困難だったように思います。そのため私自身は、大きな問題が起こらずにほっとしたというのが本音です。実際このホールの設備機器は使用経験のある方からも、すごく難しいと聞いていました。特にPCのタッチパネル操作が中心で慣れるまでに時間がかかること、AV操作と照明の操作が1階と2階に分かれてしまい、学生スタッフへの指示がうまく伝わらなかったことが主な原因です。設備が最新でもインターフェースが重要であることを身をもって体験しました。

国際会議のメインとなるテクニカルセッションは、国際交流ホールと会議室で行われました。ここで国際交流ホールは間仕切り壁で3つに仕切られ、それに会議室1室を加えた4パラレルでのセッションでした。私は、机、椅子の配置とAV機器の準備を担当していました。AV機器については、一部でプロジェクターの接続に不具合が発生し、これは別途接続テスト環境を用意していれば避けられた問題だったかもしれません。また懸念されたのは、プレナリーセッション時の机、椅子再配置、会場予約の都合上、短時間での会場設営、片付けをする日が何度かあった点です。これについては当日に会場係以外に多くの方の協力が得られたおかげで、無事乗り切ることができました。

会場運営全体を通しては、会議中や会議終了後に何人かの方からお褒めの言葉を頂きました。これは鈴木広隆実行委員長から「日本のおもてなしの心」を持って接するよう指示をいただき、それをスタッフ全員が実践できた結果だと思います。最後になりますが、私自身はじめての国際会議の運営で、多くの方にご指導頂き大変貴重な経験をさせて頂いたこと、この場を借りてお礼申し上げます。

バンケットメニュー

畠山 絹江 (神戸ファッション造形大学)

本会議のメインディナーであるバンケットのメニューは、海外のお客様が来日したら一度は賞味したい人気の食べ物は、寿司・てんぷら・すき焼きと聞いていたので、ガーデンオリエンタル京都のイタリアン料理と和風料理のミックスメニューとした。

「FOOD MENU」

鮮魚のカルパッチョ レモンヴィネグレット (伊)
穴子の八幡巻きと九条ネギのグリル (和)
鮮魚の南蛮漬 (伊・和)
ズワイガニの冷茶碗蒸し (和)
エビと旬野菜のてんぷら (和)
旬野菜のパーニャカウダ (伊)
季節野菜のサラダ (伊)
サルサチャと4種豆の煮込み (伊)
本日のパスタ (伊)
子牛のロースト サルサベルデ (伊)
ビーフサーロインのステーキ (和風ソース・ペッパー・レモンのお好み)
握り寿司の盛り合わせ (和)
パン (伊)

「DESSERT MENU」

マCHEDニア, ウイークエンド, ガトーショコラ, 季節のデザート, デリッシア, 抹茶ブラウニー

「DRINK MENU」

乾杯用スパークリングワイン, ビール, 赤ワイン, 白ワイン, 日本酒, 焼酎, カクテル, ウイスキー
ウーロン茶, オレンジジュース, グレープフルーツジュース, コーヒ, 紅茶

最初、お料理の出だしが遅れがちで案じましたが、その後は次々とテーブルを賑やかにし皆様もドリンクを飲み会話を弾ませながら召し上がっておられ、思惑通り握り寿司、揚げたての天ぷらは瞬く間になくなる程でした。またケーキやデザートも残るくらいあり、晩餐会はこのメニューで良かったと安堵した。

中国からの参加者について

高 三徳 (いわき明星大学)

ICGG2010に中国から団体(中国図学会)24名と個人7名が出席し(図1と2)、6人が座長を勤め、21篇以上の論文が発表された。参加者数は開催国日本に続き2番目に多かった。参加者数、座長人数、発表論文数のいずれも中国図学会の海外国際会議参加の新記録となった。中国からの参加者は学术交流だけでなく、日本図学会との交流や日本文化の体験などでも収穫が大きく、大変満足であった。その成果報告は中国図学会のホームページ <http://www.cgn.net.cn/> と学術誌「土木建築工程情報技術」(No. 3, 2010) および学会創立30周年(2010年11月)記念号に掲載してある。本稿では、ICGG2010終了までの中国からの参加者との連絡対応について報告する。

2009年4月に加藤道夫組織委員長から実行委員の委嘱を受け、5月に組織委員会・実行委員会の合同委員会で日本図学会堤江美子会長より中国からの参加者との連絡対応担当に指名されて、中国の関係者への連絡を始めた。9月に鈴木広隆実行委員長の指示を受けてICGG2010会告の中国版を完成させ、中国側の左宗義組織委員をはじめここ数年ICGGや日中図学教育研究国際会議



図1 ICGG2010会場入口での中国図学会団体



図2 バンケット会場で歌う中国からの参加者

の中国人参加者等88名へ送付し、ICGG2010への参加を誘った。多くの参加希望者から返事があり、中国図学会がICGG2010会告の中国版を学会ホームページに掲載して宣伝し、団体が参加する意向が示された。10月に中国図学会が団体が参加することを決定し、団長を国際交流担当の韓宝玲教授、副団長をCG専門委員長の何援軍教授および事務局副局長の楊潔さんに任命した。これから楊潔さんが中国側の連絡窓口の担当となった。11月に予備登録の催促を行った。中国図学会からICGG2010の直前または直後に日本で日中図学教育研究国際会議も開催可能かの打診があったが、日本図学会とICGG2010実行委員会の検討した結果、見送りとなった。12月に、Extended Abstract 提出催促およびWEB操作指導を行った。中国側からICGG2010 ProceedingsのEIやSCIの検索可能性についての問い合わせがあり、これに対して実行委員会が検討を行い、EIへの登録手続きが行われたが、エルゼビア社から回答は得られなかった。また、中国図学会はISGGへの協力の一環として、ICGG2010参加者団体がISGGに入会させることを決定し、楊潔さんから団体入会の手続きについての問い合わせがあった。これに対してISGG副会長でもある山口泰副実行委員長が対応した。

2010年4月に中国側から団体参加者の名簿と個人情報情報が送られ、ビザ申請に必要な書類の発行や参加費の支払い方法についての問い合わせがあった。これに対して、鈴木広隆実行委員長が在職証明書、招待状(英文)、招聘理由書および滞在予定表を準備し始め、財務担当の椎名久美子実行委員が参加費の請求書と領収書の仕様を作成した。5月に中国図学会団体26名がISGGに入会手続きを済ませ、椎名久美子実行委員より中国図学会にICGG2010参加費請求書を送り、26名の参加費の送金を確認した。また、鈴木広隆実行委員長よりビザ申請用の書類を中国側に送り、確認をもらうことになった。6月にWEB登録および論文修正・再提出を催促した。中国側からビザ申請書類の修正依頼を受け、鈴木広隆実行委員長が修正書類を中国図学会に送付し、中国側がビザ申請の手続きを始めた。なお、中国図学会から、ICGG2010終了後団体が北海道大学への見学の依頼があった。これに対して、堤江美子会長が早速北海道大学の早坂洋史先生に協力を依頼し、北海道大学のキャンパスや博物館や植物園などの見学を企画したが、中国図学会団体の日程等の問題で断念となった。7月にもWEB登録および論文修正・再提出の催促を継続した。特に、中国から3名の参加予定者が海外旅費やスケジュールなどの原因でICGG2010に出席することができなくなり、論文の代

理発表、あるいは参加費の払い戻しについて対応した。8月5日に中国からの参加者を迎えた。会議期間中は、中国からの参加者が論文発表および討論に積極的に取り込み、日本図学会の代表と今後の学術などの交流についての意見交換会を開き(図3)、記念品を送呈した(図4)。また、中国図学会の代表はISGGの役員と面談し(図5)、ISGGに更なる協力として3000米ドルを寄付することを決定した。8月9日の午後に閉会式終了後、中国からの参加者を見送った。

末筆ながらここをお借りして、中国からの参加者との連絡対応にご協力いただいた鈴木広隆実行委員長、山口泰副実行委員長、堤江美子会長、椎名久美子実行委員、三谷純実行委員、近藤邦雄組織委員、北海道大学の早坂洋史先生、中国図学会の国際交流担当の韓宝玲教授および事務局副局長の楊潔さんなどの皆様に深く感謝の意を表す。



図3 意見交換会に出席した日中両国の図学会の代表たち

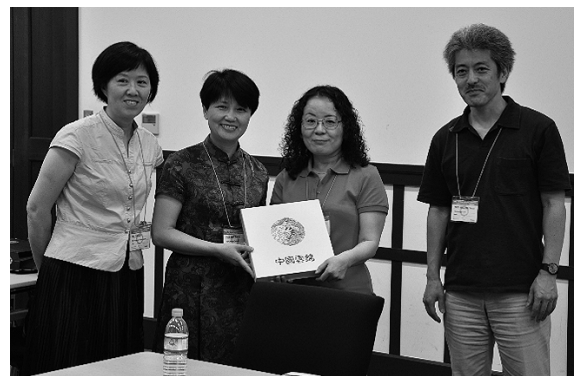


図4 記念品送呈



図5 中国からの参加者とISGG会長との写真

第14回図学国際会議京都大会 反省点

図学国際会議関西タスクグループ（会議記録者：榎 愛）

図学国際会議の会場運営やエクスカージョン、同伴者ツアー、パンケット等を担当した関西タスクグループでは、下記の要領で最終のミーティングを開催した。

日時：2010年10月18日 18：00～19：00

場所：大阪市立大学文化交流センター 小セミナー室

出席者：阿部浩和委員，飯田尚紀委員，大西道一委員，大村勝委員，小高直樹委員，榎愛委員，鈴木広隆委員，橋寺知子委員，畠山絹江委員，吉田勝行委員

そして、会議期間中の写真を見ながら大会全体を振り返り、準備・運営等についての意見交換を行った。ここで得られた反省点は、次に図学会が中心となって国際会議を行う際の貴重な教訓となると考え、そのまま記録として図学研究に掲載することを希望し、了承を得たので、下記に記すものである。

■受付について

- ・デスクの幅が狭かった。机がもう1つあるとよかった。
- ・受付前後の休憩スペースが不足していた。デスク向かいの椅子がもう少し多ければよかった。
- ・受付前に理事会が開催されており、早く会場に到着した参加者を中途半端な場所で待たせることになった。

■部屋割について

- ・各部屋における発表内容を示す掲示が扉になかった（途中で気づいて掲示したが）。次回からはじめから掲示する。
- ・デスク、荷物置き場、展示が密集しており、スペースが狭かった。もう1部屋あるとよかった。

■セレモニー、セッションについて

- ・発表者の手元が暗く、原稿が読めなかった。発表者の手元には照明があるとよい。
- ・発表者のマイクは手持ちではなくピンマイクの方がよい。
- ・宮崎先生のご講演では、参加者が多く過密だった。

■ランチ、コーヒープレイクについて

- ・ランチが大量に余ってしまった。場所が遠かったのが原因か？
→東京大会でもランチが離れた場所だったので、今回と同じ状況であったが。

- ・ランチは、メニューのバリエーションが少なかった。

■エクスカージョン

- ・大江能楽堂では、内容が専門的で通訳が円滑に行われなかった。
- ・清水寺の自由行動は懸念事項となっていた（道に迷う人が出てくるのではないか）が、問題なく全員集合できた。

■パンケット

- ・予定よりも早く参加者が集合してしまい、パンケット開始まで待ち時間ができてしまった。
- ・部屋は少し狭く感じられたが、雰囲気、景色が大変よかった。
- ・2部屋に分かれるのが懸念されていたが、一体感があった。
- ・食事が出てくるスピードが遅く、最後になって一度に出てきた。逆に、早く食べ物がなくなってしまうことがなく、その点ではよかった。
- ・メニューがよかった。

■全体

- ・ホールの空調がなく、暑かった。
- ・参加者にアンケートを実施したらよかった。
- ・企業展示へ行く人が少なかった。
→少々入りにくい雰囲気があった。ポスター展示の部屋と逆にすればよかったかもしれない。
→企業によるプレゼンテーションの時間を確保すればよかった。

ICGG2010収支報告

収入

費目	内容	金額
開催費用	ISGG より開催費用として1000ドル相当額	92,770
共催費用	日本図学会より共催費用として2000ドル相当額	178,740
助成金	栢森情報科学振興財団より助成金	200,000
	大阪電気通信大学より国際交流助成	432,910
寄付金	図学会名誉会員, 正会員より (64件)	2,590,000
	団体 (賛助会員を含む) より (13件)	915,000
参加登録費	会議参加者より	7,603,929
論文集売上	現地にて実費で販売	15,000
雑収入	銀行口座の利息	1,803
合計		12,030,152

支出

費目	内訳	金額	小計
論文集作成	論文集作成	1,079,190	1,079,190
招待講演	フライトチケット代	402,080	624,460
	ホテル代および謝金	222,380	
会場・運営費	会場借用費	1,108,485	2,888,919
	アルバイト人件費	506,030	
	郵送代, 物品運送時のタクシー代等	6,080	
	看板サイン作成/パネル設置	493,920	
	グッズ	493,795	
	消耗品	33,909	
	無線 LAN および機器レンタル	196,700	
	名札	50,000	
	飲食費	歓迎レセプション	
	公式バンケット	2,404,040	
	ランチ	838,000	
	コーヒーブレイク	177,980	
社交プログラム運営費	半日ツアー	890,500	1,007,410
	同伴者ツアー	116,910	
諸案内印刷	フライヤー印刷	204,855	210,317
	消耗品	5,462	
諸案内郵送費	郵送代	132,461	132,461
事務経費	レンタルサーバ, ドメイン取得および維持, インターネットバンキング利用料金, 消耗品など	293,538	293,538
旅行者手数料	参加登録費用 (登録システムなど)	708,750	1,079,250
	インフォメーションデスク (期間中デスク)	189,000	
	参加登録費用の回収代行手数料	181,500	
報告書印刷費	図学研究第44巻4号	700,420	700,420
ISGG 奨励費	ISGG 新規入会者の初年度会費立替	48,000	48,000
合計		11,655,495	11,655,495

差し引き残額

374,657

以上の通り, 収支決算をご報告いたします。

平成22年12月10日

実行委員会 財務担当 小高直樹 椎名久美子 榊愛

1. 寄付者一覧

(1) 個人（五十音順）

東 弘孝	阿部 浩和
荒木 勉	有吉 省吾
安藤 直見	稲葉 武彦
井野 智	岩井 實
太田 英一	大西 道一
小高 司郎	小高 直樹
金井 崇	北 栄輔
倉田 和夫	高 三徳
小佐田 哲男	小林 範夫
近藤 邦雄	榊 愛
坂本 勇	佐久田 博司
桜井 俊明	佐藤 仁一朗
澤田 吉苗	椎名 久美子
鈴木 賢次郎	鈴木 広隆
高山 文雄	武内 照子
知花 弘吉	辻合 秀一
堤 江美子	秋田 宏
堤 浪夫	長坂 今夫
中澤 洋二	長島 忍
永野 三郎	西岡 正春
橋寺 知子	橋場 幸宗
畠山 絹江	早坂 洋史
平野 重雄	廣尾 靖彰
福田 幸一	本郷 健
前田 眞正	町田 芳明
松倉 満智子	三谷 純
道川 隆士	村上 紀子
村松 俊夫	面出 和子
森 香織	山内 一晃
山口 泰	山島 一浩
横澤 肇	横山 弥生
横山 ゆりか	吉田 勝行

(2) 団体（五十音順）

株式会社アルトナー
オートデスク株式会社
学校法人大妻女子大学
株式会社カンセツ
近鉄エンジニアリング株式会社
CG-ARTS 協会（財団法人画像情報教育振興協会）
ソリッドワークス・ジャパン株式会社
株式会社テクノエイト
電算印刷株式会社

社団法人日本機械設計工業会関西支部

日本通運株式会社

ハヤト商事株式会社

日本図学会北海道支部設立20周年記念事業実行委員会

2. 助成金（五十音順）

大阪電気通信大学（国際交流助成）

栢森情報科学振興財団（フォーラム・シンポジウム等開
催助成金）

●プログラム

Thursday, 05. 08. 2010

Welcome Lecture T. IYORI AN ADVENTURE IN FOUR-DIMENSIONAL SPACE AND TIME	K. MIYAZAKI – Japan
---	---------------------

Friday, 06. 08. 2010

OPENING CEREMONY			
Plenary Session K. SHIINA, G. WEISS TURNED IVORY POLYHEDRA			
AN INTRODUCTION TO THE USE OF 3D DIGITAL DATA OF CULTURAL PROPERTIES (SCULPTURE) IN EDUCATION AND RESEARCH			
T. TARNAI – Hungary S. YABUUCHI – Japan			
Mechanics & Structure <i>P. MAYRHOFER, D. VELICHOVÁ</i>	Formative Design <i>M. KATO, E. WOHLLEBEN</i>	Engineering Design <i>H. ABE, Y. LIU</i>	Architectural Design Education <i>P. CASU, K. SUZUKI</i>
CONSTRUCTIVE & ALGEBRAIC GEOMETRY IN KINEMATICS P. ZSOMBOR-MURRAY – Canada	COMPUTING THE HISTORY TOWARD THE FUTURE S. ANDREANI – Italy	A METHOD FOR GEOMETRIC MODELING AND GRAPHIC SIMULATION OF ELLIPTIC GEAR WITH INVOLUTE TEETH PROFILE X. TANG, M. ZHANG, F. REN, S. GAO – China	3D-PLOTS CAUSE A REVIVAL OF PHYSICAL MODELS IN ARCHITECTURE AND ARCHITECTURAL EDUCATION A. SCHMID-KIRSCH – Germany
A STUDY ON SPACIAL ARRANGEMENTS WITH TORUSES METHOD BASED ON HOW TO PACK RODS K. MORITA – Japan	UTILIZATION OF RAPID PROTOTYPING SYSTEM FOR LAMP SHADES DESIGN H. SUZUKI, N. IIDA – Japan	CONFIGURATION OF BIOLOGY AND ARTIFICIAL DESIGN T. SAKURAI, R. NEMORI – Japan	SELF-TELLING DEVICES : THE GRAPHIC PORTFOLIO M. LO TURCO, M. GHIO – Italy
GEOMETRY OF PENTAHEDRAL MACROSTRUCTURAL LATTICE E. BERVALDS, M. DOBELIS – Latvia	DESIGNING A NEW TOY TO FIT OTHER TOY PIECES – A SHAPE-MATCHING TOY DESIGN BASED ON EXISTING BUILDING BLOCKS Y. IGARASHI, H. SUZUKI – Japan	A COMPUTER AIDED SYSTEM FOR INTERACTIVE WIG DESIGN M. NIIZEKI, Y. TAKENAKA, Y. TASAKA – Japan	GEOMETRIC STRUCTURALISM IN ARCHITECTURE C. LEOPOLD – Germany
THE SELF-MOTIONS OF A FULLEROID-LIKE-MECHANISM O. RÖSCHEL – Austria	PARAMETRIC RECONSTRUCTION OF THE SPACE IN VERMEER'S PAINTING » GIRL READING A LETTER AT AN OPEN WINDOW« D. LORDICK – Germany	DESIGN COLLISION-FREE GEOMETRY ON DENTAL PROSTHESES E. SOLABERRIETA, A. ARIAS, R. MINGUEZ, J. MUNIOZGUREN, L. BARRENETXEA – Spain	DEVELOPMENT OF PRE-ADMISSION GRAPHIC DESIGN EDUCATION M. MIYAMOTO – Japan
ON SOME SURFACES IN KINEMATICS M. HUSTY – Austria	ANALYSIS OF OCULAR MOTILITY IN DIGITAL SIGNAGE SCREEN DESIGNS J. ENDO, K. MOTOYAMA, A. NAKAMURA – Japan	THREE-DIMENSIONAL MULTI-PIPELINE PLANNING BASED ON ANT COLONY ALGORITHM D. JIANG, B. LIU, Y.-F. QU – China	ARCHITECTURAL PHOTOGRAPHY –A COURSE FOR STUDENTS OF ARCHITECTURE F. SCHMITT – Germany
Surfaces <i>M. HUSTY, P. ZSOMBOR-MURRAY</i>	Art <i>J. ENDO, D. LORDICK</i>	Materials and Simulation <i>L. BARRENETXEA, M. NIIZEKI</i>	Spatial Ability <i>M. MIYAMOTO, A. SCHMID-KIRSCH</i>
3D-MODELLING OF SPECIAL D-FORMS MADE FROM ELLIPTIC SHAPED DEVELOPMENTS P. MAYRHOFER – Austria	THE CONSTRUCTION OF A RIDEABLE GEOMETRIC OBJECT BASED ON A CONICAL FORM : REGARDING "SPACE WALK ON THE EARTH" WITH ELLIPSOIDAL ROLLING PLANE T. MURAMATSU – Japan	POLYHEDRAL DESIGN OF CELL-STRUCTURED MATERIALS FOR THEIR STATIC AND DYNAMIC MECHANICAL RESPONSES T. AIZAWA – Japan	TENDENCY OF SPATIAL ABILITY IN CG ANIMATION OF BUILDINGS Y. DEKI, K. YASUFUKU, H. ABE – Japan
MODELLING AND PROPERTIES OF TUBES AND KNOTS D. VELICHOVÁ – Slovakia	THE FORMATION OF THE CONCEPT OF A SOLID IN SCULPTURE Y. FUKUE – Japan	VISIBLE NUMERICAL SIMULATION FOR HEAT TREATMENT TEMPERATURE FIELD OF LASER DYNAMIC REMELTING ON CAST IRON SURFACE Y. LIU, P. YI, Y. SHI, G. LUN, H. REN – China	CHANGE OVER TIME IN SPATIAL ABILITY OF STUDENTS ENTERING UNIVERSITY – IMPACT OF REVISION OF THE NATIONAL CURRICULUM GUIDELINES UP TO HIGH SCHOOLS- Y. SUGAI, K. SUZUKI – Japan
VISIBILITY OF SUBDIVISION SURFACES H. KAWAHARADA, K. KASE – Japan	TENSION AND DEFORMATIONS IN ELASTIC POLYHEDRAL RINGS MADE OF CORPUSCLE ELEMENTS E. WOHLLEBEN, W. LIEBERMEISTER – Germany	GEOMETRIC ANALYSIS FOR ADJUSTABLE PUNCH-DIES OF A PRESS-FORMING MACHINE OF SPIRAL PLATES S. GAO, K. NAKASA – Japan	CHARACTERISTICS OF SPATIAL IMAGINATION ABILITY BY MEANS OF A DESCRIPTION OF ARCHITECTURE IN A BOOK BY JUNICHIRO TANIZAKI –RESEARCH INTO SPATIAL IMAGINATION ABILITY- M. HAMANO, H. ABE – Japan
USING BIQUADRATE TRANSFORMATIONS OF A PLAIN FOR DESIGNING DOME – SHAPED SURFACES A. BAIDABEKOV – Kazakhstan	A STUDY ON THE JAPANESE DESIGN THROUGH THE FAMILY CREST FORMS ; UME AND SAKURA A. SAITO – Japan	DEVELOPMENT OF AUTO-MODELING FOR NEUTRON TRANSPORT SIMULATION Y. MA, G. XIAO, B. Y. ZHANG – China	RELATIONSHIP BETWEEN STRATEGIES USED TO SOLVE SPATIAL ORIENTATION PROBLEM AND QUALITY FACTORS REQUIRED FOR STUDYING AT UNIVERSITY K. SHIINA, K. ITO – Japan
	TRANSFORMATION OF THE FORM USING 3DCG AND APPLICATION TO THE WORKS Y. YOKOYAMA – Japan		DISCUSSION ON THE COGNITION TO TWO DISCIPLINES OF GRAPHICS AND ENGINEERING GRAPHICS B. TONG, B. HAN – China
Poster Session N. ANDO			
MECHANICAL DESIGN AND DRAWING EDUCATION FOR HEARING-IMPAIRED STUDENTS THROUGH 3D-CAD/RP MODELING AT TSUKUBA UNIVERSITY OF TECHNOLOGY			
FUNDAMENTAL PRINCIPLES OF DESIGN AND TECHNOLOGICAL DEVELOPMENT OF AN ENGINEERING PRODUCT			
T. ARAKI, S. HOSAKA – Japan A. Y. BRAILOV – Ukraine			

STEREO PERSPECTIVE	A. A. CUCAKOVIC, M. S. NESTOROVIC, B. S. JOVIC – Serbia
4D SPACE GEOMETRY	A. A. CUCAKOVIC, M. S. NESTOROVIC, B. S. JOVIC – Serbia
FREE FORM SURFACE STRUCTURES	A. A. CUCAKOVIC, M. S. NESTOROVIC, B. S. JOVIC – Serbia
FROM THE DESCRIPTIVE GEOMETRY TO THE INFORMATICS LANGUAGE	F. DI PAOLA, M. R. PIZZURRO – Italy
HOW TO EVALUATE THE ABILITY TO READ ENGINEERING DRAWINGS	M. DOBELIS, G. VEIDE, E. LEJA – Latvia
GEOMETRICAL PERSPECTIVE – THE TORICAL PERSPECTIVE	F. DOLI – Republic of Kosovo
COLLINEAR NOTE	H. EBISUI – Japan
THE ALGORITHMIC ASSEMBLY APPLYING PENROSE TILING PATTERN	Y. IKEDA, Y. OMURA, K. HASEGAWA – Japan
FACILITATION OF INDIVIDUAL LEARNING PROCESSES WITH ADVANCED INSTRUCTIONS	G. INTVEEN, C. PÜTZ – Germany
CONCEPT OF GRAPHIC THINKING IN GRAPHICS RECOGNITION	R. IWATA, S. HIRANO – Japan
WHY DOES THE FACE OF VENUS OF MILO DIFFER BETWEEN RIGHT AND LEFT?	M. MIYANAGA – Japan
RELATIONSHIP BETWEEN EACH PROBLEM OF MCT AND STATUS OF ACTIVATION REGIONS OF SUBJECT'S PREFRONTAL CORTEX BY FNIRS	S. NISHIHARA, K. NISHIHARA – Japan
A BOOK OF STONE	N. PISACANE, L. CARLOMAGNO – Italy
GEOMETRIC ANALYSIS OF GOTHIC OPENINGS WITH OGEE ARCH	C. PISU – Italy
GEOMETRIC MODEL OF KINEMATIC SURFACES ON THE BASE OF ONE-SHEET HYPERBOLOIDAL SURFACES OF REVOLUTION (ONE AXOID IS LOCATED IN THE INTERIOR OF ANOTHER AXOID)	G. S. RACHKOVSKAYA, Y. N. KHARABAYEV – Russia
“GEMA PROJECT”, GEOMETRY AND MATHEMATICS	D. ROCHMAN – Mexico
FONT DESIGN FOR USE IN THE VISUALLY IMPAIRED – PROPOSAL OF A GUIDELINE FOR FONT DESIGN –	H. RYU – Japan
A VISUAL REPRESENTATION FOR RELATIONSHIPS BETWEEN EQUATIONS IN PHYSICS	K. SHIGA, K. MOTOYAMA – Japan
GEOMETRIC COMPUTATION, DUALITY AND PROJECTIVE SPACE	V. SKALA – Czech Republic
DO ARCHITECTS USE GEOMETRY? THE GEOMETRICAL FORMS OF SELECTED CONTEMPORARY ARCHITECTURAL OBJECTS	M. SROKA-BIZON – Poland
PROPOSAL OF FREE-FORMED LINE-OF-ACTION AND DYNAMIC GENERATION METHOD	N. SUGA, H. SATO, S. CHO – Japan
ON QUADRUPLES OF GRIFFITHS POINTS	K. WITCZYŃSKI – Poland

Saturday, 07. 08. 2010

Plenary Session T. BRANOFF, I. TANAKA			
BIM AND ITS IMPACT ON ENGINEERING & GRAPHIC COMMUNICATION EDUCATION			
RESEARCH OF DIGITAL LEAD DESIGN PROCESS			
C. CORY – USA			
T. YAMASHITA – Japan			
History of Graphics N. ODAKA, G. WEISS	Paintings F. FADÓN, J. MITANI	3D Captured Data Processing M. MANEVICH, H. SUZUKI	CAD / CG Education (1) T. BRANOFF, K. FENG
BETWEEN SEEING AND BEING –A HISTORICAL OVERVIEW OF PERSPECTIVE– M. KATO – Japan	EVALUATION OF DIFFUSE REFLECTANCE OF WATER SCREEN AND OPEN EXPERIMENT WITH PROJECTED ANIMATION K. TAKECHI, H. SUZUKI – Japan	SEGMENTATION OF CYLINDRICAL SURFACES ON UNFILTERED SCANNED OBJECTS BASED ON SPIN-IMAGES L. BARRENETXEA, R. MINGUEZ, E. SOLABERRIETA, O. ETXANIZ, E. SIERRA – Spain	CORRELATION OF MENTAL CUTTING TEST (MCT) RESULTS WITH THE APPLICANT SCORES ON CAD QUALIFICATION EXAMINATION S. NISHIHARA, K. NISHIHARA – Japan
GEOMETRIC ANALYSIS OF ARCHITECTURAL DRAWINGS OF THE 19TH CENTURY P. CASU – Italy	RECONSTRUCTING VERMEER'S PERSPECTIVE IN 'THE ART OF PAINTING' G. GUTRUF, H. STACHEL – Austria	VOLUME PROXY MESH AND NEW MESH QUALITY EVALUATION METHOD IN MODELING OBJECTS WITH BACKGROUND ELEMENTS K. W. C. HUNG, M. NAKAO, K. YOSHIMURA, K. MINATO – Japan	DEVELOPMENT OF EDUCATIONAL 3D CAD SELF-LEARNING SYSTEM (PROCESSING OF AUTOMATIC SCORING AND GUIDANCE) Y. MIYAMOTO, Y. NAGASAKA, S. HIRANO – Japan
DIAGRAMMATIC PLANS OF JAPANESE HOUSES – A STUDY ON THE FORMS OF CONTEMPORARY HOUSES – N. ANDO, M. TANEDA, A. SHIBATA – Japan	REGARDING DISTORTION IN PICTORIAL SPACE –REPRESENTATION OF BIRD'S EYE VIEW DRAWING BY HATSUSABURO YOSHIDA– K. MENDE – Japan	A LOD SYSTEM BASED ON BIOLOGICAL CLASSIFICATION AND ANATOMICAL SKELETON L.-H. CHEN, Y.-S. CHEN, J. SHIE – Taiwan	TEACHING COMPUTER AIDED DESIGN WITH THE USE OF DYNAMIC GEOMETRY F. PEREZ – Spain
	GRAPHIC PRESENTATION ON THE CITY DRAWINGS AND VIEW PAINTINGS OF HIRADO, THE FIRST DUTCH VOC TRADING FACTORY IN JAPAN N. NAO – Japan	A FAST CULLING SCHEME FOR DEFORMABLE OBJECT COLLISION DETECTION USING SPATIAL HASHING S. JUNG, M.-H. CHOI – USA	DEVELOPMENT OF 3D SOLID MODELER FOR DESCRIPTIVE GEOMETRY EDUCATION Y. NIITSU – Japan
Origami Y. NIITSU, H. STACHEL	Applied Geometry L.-H. CHEN, O. RÖSCHEL	Image Processing (1) M.-H. CHOI, B. HAN	Engineering Graphics Education (1) K. NISHIHARA, F. PEREZ
REMARKS TO CLASSICAL CUBIC PROBLEMS AND THE MEAN VALUES OF VAN DER LAAN AND ROSENBUSCH G. WEISS – Germany V. W. DE SPINADEL – Argentina	GEOMETRICAL AND ANALYTICAL STUDY OF THE REFLECTED RADIATION IN A SOLAR DISH SYSTEM, TO OPTIMIZE THE RECEIVER SIZING F. FADÓN, J. E. CERÓN, D. SILLIO, E. VALLEJO, J. FUENTE – Spain	CANNY OPERATOR AND OTSU THRESHOLD SELECTION BASED ADAPTIVE EDGE DETECTION METHOD FOR IMAGE POLLUTED BY HYBRID NOISE H. CHEN, B. LI, J. YANG – China	THE DEVELOPMENT AND RESEARCH OF 3D MODEL LIBRARY BASED ON WEB 2.0 K. FENG, R. FENG – China
FORMATIONS FROM DEVELOPMENT PATTERNS N. KOBAYASHI – Japan	PARAMETRIC MODELING OF SQUARE –CIRCULAR TRANSITION TUBE WITH CONSTANT CROSS SECTION AREA X. MENG, J. LI, Z. PAN, Y. ZHU, S. LI – China	LEVEL SET BASED METHOD FOR IMAGE CONTOUR SIMPLIFICATION X. LIU, Y. OHTAKE, H. SUZUKI – Japan	HOW TO DETERMINE THE OPTIMUM REPRESENTATION PLAN IN ENGINEERING GRAPHICS L. WANG, Y. GUO – China
HIGH-DIMENSIONAL ORIGAMI AND FOLDING REGULAR SIMPLEX AROUND ITS INCENTER K. KAINO, N. YAMAO, K. YAJIMA, T. SUENAGA – Japan	LIGHT RAY TRAJECTORIES AND PROJECTIVE CORRESPONDENCES M. MANEVICH, E. ITS KOVICH – Israel	A NEW METHOD FOR EXTRACTION OF CIRCULAR TRAFFIC SIGNS USING SUBTRACTIVE COLOR MIXING Y. ARAI, E. KIM – Japan	EVALUATION OF SPATIAL ABILITY OF ENGINEERING STUDENTS IN EGYPT USING EVALUATION OF SPATIAL ABILITY OF ENGINEERING STUDENTS IN EGYPT USING MENTAL CUTTING TEST A. KHATTAB – Egypt

<p>FREEFORM VARIATIONS OF ORIGAMI T. TACHI – Japan</p> <p>A METHOD FOR DESIGNING CREASE PATTERNS FOR FLAT-FOLDABLE ORIGAMI WITH NUMERICAL OPTIMIZATION J. MITANI – Japan</p>	<p>FORMS IN THE RADIAL RECIPROCAL UNITARY SPACE M. C. FRANCO – Argentina</p> <p>IN-AND CIRCUMELLIPSES OF TRIANGLES : A CAGD APPROACH I. JUHÁSZ – Hungary Á. RÓTH – Romania</p>	<p>TOWARD A SHAPE-FREE HYBRID IMAGE : EXPERIMENTAL ON VISUAL CONTRAST SENSITIVITY P. SRIPIAN, Y. YAMAGUCHI – Japan</p> <p>THE ANALYSIS OF FACIAL IMAGES' ATTRACTIVENESS AND AGE T. SUN, Y. YAMAGUCHI – Japan</p>	<p>UNDERSTANDING HOW STUDENTS USE ONLINE INSTRUCTIONAL RESOURCES IN A BLENDED INSTRUCTION INTRODUCTORY ENGINEERING GRAPHICS COURSE T. BRANOFF, E. WIEBE, M. SHREVE – USA</p> <p>STUDY ON CONSTRUCTION SHAPE DESIGN X. JIANG, J. CHEN – China</p>
<p>Surface Modeling G. GREENFIELD, D. TUTIĆ</p>	<p>Architecture and Civil Engineering Y. YOKOYAMA, L. VÖRÖS</p>	<p>Application Systems K. KONDO, L. YUAN</p>	<p>Engineering Graphics Education (2) G. KARAULOVA, E. TSUTSUMI</p>
<p>S-PATCH : MODIFICATION OF THE HERMITE PARAMETRIC PATCH V. SKALA, V. ONDRAČKA – Czech Republic</p> <p>SIMULATION OF ENVELOPE CURVE MOTION OF THE HYDROPOWER STATION HIGH-NARROW DRAFT-TUBE Q. DU, T. DU – China</p> <p>CONIC CURVES TO MODEL MECHANICAL PROPERTIES OF MATERIALS C. CUADRA – Japan</p> <p>FORCE DIRECTED NEAR-ORTHOGONAL GRID GENERATION ON SURFACES F. GRUBER, G. WALLNER, G. GLAESER – Austria</p> <p>A RULED SURFACE THROUGH THREE GIVEN SKEW STRAIGHT LINES AND THE CHASLES'S THEOREM : A REREADING THROUGH VIRTUAL LABORATORY F. FALLAVOLLITA – Italy</p>	<p>THREE-DIMENSIONAL FORMATION PROCESS OF BIM T. KASHIWAGI, K. YASUHUKU, H. ABE – Japan</p> <p>THE PARAMETRIC MODELING OF CLASSIC ARCHITECTURE STRUCTURE ON PKPM PLATFORM Y. REN, L. JIANG, L. LIU, L. ZHANG – China</p> <p>A SUPPORT METHOD FOR MAKING THREE-DIMENSIONAL COMPUTER GRAPHICS OF HISTORICAL ASSETS BY A SIMPLE THREE-DIMENSIONAL SCANNING SYSTEM T. NAKAYAMA, K. MIYAZAKI, H. TSUJIAI – Japan</p> <p>ASGT : TERRITORIAL GEOGRAPHIC SYSTEM ARCHIVES M. FABBRINI – Italy</p> <p>GEOMETRY AND MEASUREMENT BETWEEN TRADITION AND INNOVATION C. GAMBARDELLA, M. PISCITELLI – Italy</p>	<p>CONSTRUCTION OF ONTOLOGY-BASED GEOMETRY MODELING SERVICES TOWARDS LARGE-SCALE INFORMATION VISUALIZATION H. CAI, Y. HE, F. BU – China</p> <p>DEVELOPING DRAWING OF SPIRAL GROOVE'S SURFACE GIVEN BOUNDARY EQUATIONS BASED ON REDEVELOPMENT OF SOLIDWORKS Y. SONG, Z. CHENG, X. JIANG, M. ZHANG, L. HE – China</p> <p>APPLYING SMART GRAPHIC OBJECTS TO AUTOMATICALLY GENERATE A CONSTRUCTION PROJECT SCHEDULE IN CAD SYSTEM Y.-J. CHEN, C.-W. FENG, Y.-R. WANG, P.-S. CHANG – Taiwan</p> <p>COMMUNICATION OF ENGINEERING COMPUTER GRAPHICS USING WEB 3D T. MOCHIZUKI – Japan</p> <p>SYNTHESIS OF IMAGES FOR INTEGRAL PHOTOGRAPHY USING BLENDER M. YODA, K. YANAKA – Japan</p>	<p>STUDY OF A VIRTUAL TEACHING ENVIRONMENT ON MECHANICAL GRAPHICS Q. HU, L. WANG, H. SHU, X. WANG, H. DAI – China</p> <p>TEACHING REFORM AND PRACTICE IN ENGINEERING DRAWING BASED ON 3D MODELING WITH COMPUTER J. WANG, Y. HAO – China</p> <p>ENGINEERING GRAPHICS EDUCATION AND MODERN ENGINEERING DESIGN IN CHINA B. HAN, H. ZHANG, X. LUO, Q. LUO – China</p> <p>USE OF SEMIOTIC APPROACH IN TEACHING OF THE ENGINEERING GRAPHICS COURSE H. LILLE, A. RUUS – Estonia, C. LEOPOLD – Germany</p> <p>THE ORTHOGRAPHIC PROJECTION ANALYSIS OF GEOMETRICAL ELEMENTS ON A CUBOID X. MENG, S. LI, J. LI, Y. ZHU, Z. PAN – China</p>

Sunday, 08. 08. 2010

<p>Plenary Session O. RÖSCHEL DISCRETE GLIDING ALONG PRINCIPAL CURVES H.P. SCHRÖCKER – Austria</p>			
<p>CG G. GLAESER, V. SKALA</p>	<p>Motion / Curve Approximation F. FALLAVOLLITA, H.-P. SCHRÖCKER</p>	<p>Animation N. PISACANE, T. KANAI</p>	<p>CAD / CG Education (2) Y. HE, C. LEOPOLD</p>
<p>ANALYSIS OF THE SHAPE FEATURE EMERGING FROM THE COMBINATION OF GEOMETRIC ELEMENTS S. KAWANISHI, Y. UJIE, Y. MATSUOKA – Japan</p> <p>A DYNAMICAL MODEL OF MANIFOLD'S DEFORMATION AND IT'S APPLICATION TO 3DCG ANIMATION I. TAKAUCHI, Y. HARA, H. SAITO, R. ASAKURA, M. HATTORI – Japan</p> <p>SETS OF SPACE-FILLING ZONOTOPES WITH CONNECTION TO ART AND DESIGN L. VÖRÖS – Hungary</p> <p>ALGORITHMS FOR GENERATION OF IRREGULAR SPACE FRAME STRUCTURES F. GRUBER, G. WALLNER – Austria</p>	<p>NEW METHOD FOR REDUCING SHARP CORNERS IN CARTOGRAPHIC LINES WITH AREA PRESERVATION PROPERTY D. TUTIĆ, M. LAPAINE – Croatia</p> <p>EXTENDED QUADRATIC B-SPLINES WITH APPLICATIONS FOR CONICS AND HISTOGRAMS APPROXIMATION X. HAN – China</p> <p>ON SIMULATING DRAWING ROBOTS WITH STRAIGHT LINE MOTION BUT CURVILINEAR PEN PATHS G. GREENFIELD – USA</p> <p>INVARIANT PLANAR MOTION INTERPOLATION USING POSITIONS AND POLES G. F. BÄR – Germany</p>	<p>DEVELOPMENT OF 3D ACCIDENT SIMULATION SYSTEM L. YUAN, C. YUAN, J. YANG – China</p> <p>VISUALIZATION OF CROWD BEHAVIOR USING EVACUATION SIMULATION FRAMEWORK K. YASUFUKU – Japan</p> <p>DEVELOPMENT OF STORE ARRANGEMENT SYSTEM BY CROWD SIMULATION J. SUGIE, T. NAKATA, K. YASUFUKU, H. ABE – Japan</p> <p>THE ANALYSIS OF THE ANIMATION MOVEMENT T. KOMMA, K. KONDO, H. SATO, S. CHO – Japan</p>	<p>THE USE OF MULTIMEDIA IN PREPARING AN EDUCATIONAL PROGRAM FOR WOMEN'S BRA SEWING SKILLS AND MEASURING ITS EFFECTIVENESS H. ABDELFATTAH – Egypt, G. KARAULOVA – China</p> <p>CAD EDUCATION USING MINDSTORMS NXT H. TSUJIAI – Japan</p> <p>AN EXPERIMENT ON EFFECTIVENESS OF INTERACTIVE VISUAL TEACHING MATERIAL IN 3-DIMENSION COMPUTER GRAPHICS EDUCATION M. MORI, H. TOMINAGA, K. HIROSE – Japan</p> <p>IMPROVEMENT IN SPACE SENSE OF STUDENTS IN A COMPUTER GRAPHICS COURSE USING 3D-CG SOFTWARE E. TSUTSUMI – Japan</p>
<p>Official Excursion & Banquet</p>			

Monday, 08. 09. 2010

2D Descriptive Geometry <i>G. F. BÄR, Q. YU</i>	Pattern & Image <i>I. JURANE, K. MENDE</i>	2D Applications <i>L.-Y. CHENG, S. YOSHIZAWA</i>	CAD Education <i>G. WALLNER, K. YOSHIDA</i>
A CONGRUENCE THEOREM OF TRIANGLE CONSTRUCTED BY 3 SIMSON-LINES ON 5 CENTROIDS + ONE POINT <i>H. EBISUI – Japan</i>	DYNAMIC GEOMETRY FOR ROMAN MOSAIC FLOORS IN POMPEII <i>O. ZERLENGA, L. SPURIA, A. SCHIAVONE – Italy</i>	SPACE FILLING CURVES AND THE TOWER OF HANOI <i>D. R. CAMP – USA</i>	INFLUENCE OF DIFFERENCES IN GRAPHIC OPERATION PROCEDURES ON WORK – PUZZLE OPERATION AS AN EXAMPLE – <i>N. MIYAKOSHI – Japan</i>
SOME PROPERTIES OF KIEPERT CONICS IN THE HYPERBOLIC PLANE <i>S. MICK – Austria</i>	BEHIND THE IMAGE : CODES AND SUGGESTIONS BETWEEN EASTERN AND WESTERN REPRESENTATION <i>L. COCCHIARELLA – Italy</i>	INTERACTIVE WEB-BASED APPLICATION FOR VISUALIZATION OF SPATIAL DATA OF THE FOUR-YEARS REHABILITATION AND RECONSTRUCTION PROCESS OF TSUNAMI AND EARTHQUAKE IN ACEH-NIAS, INDONESIA <i>N. DJALALUDDIN, H. ISHIZUKA – Japan</i>	A NEW ARCHITECTURE OF COMPUTER GRAPHICS <i>Y. HE – China</i>
EQUIOPTIC POINTS OF A TRIANGLE <i>B. ODEHNAL – Austria</i>	A STUDY OF THE STONES ARRANGEMENT IN THE GARDEN OF RYOAN-JI TEMPLE MAKING USE OF VORONOI DIAGRAM <i>H. SUZUKI, Y. FUJIMOTO, T. TSUJI – Japan</i>	MAP INFORMATION SYSTEM FOR MOBILE DEVICE USING AUGMENTED REALITY AND QR CODE <i>Y. KOSHIISHI, H. SATO, H. SUZUKI, S. CHO – Japan</i>	DESIGN CONCEPTION ABILITY OF MECHANICAL ENGINEERS USING THREE-DIMENSIONAL COMPUTER-AIDED DESIGN (3D CAD) <i>S. KISE, S. SEKIGUCHI, K. OKUSAKA, S. HIRANO – Japan</i>
THE GOLDEN RATIO <i>I. STIPANCIC-KLAIC, J. MATOTEK – Croatia</i>	A FAMILY OF “THREE ELEMENT” M.C. ESCHER PATTERNS <i>D. J. DUNHAM – USA</i>	DEVELOPMENT OF A NAVIGATION SYSTEM FOR PEDESTRIANS USING IMAGE SEARCH BASED ON MAP-READING AND AUGMENTED REALITY <i>K. YAMASHIMA, H. ISHIZUKA – Japan</i>	THE REPORT OF APPAREL DESIGN EDUCATION WITH 3-DIMENSIONAL AND 2-DIMENSIONAL APPAREL CAD SYSTEMS <i>K. HATAKEYAMA, N. IIDA – Japan</i>
Drawing / Projection <i>B. ODEHNAL, I. STIPANCIC-KLAIC</i>	Visualization of Spatial Composition <i>L. COCCHIARELLA, D. J. DUNHAM</i>	Image Processing (2) <i>H. ABDELFAH, K. YASUFUKU</i>	Descriptive Geometry Education <i>D. R. CAMP, N. IIDA</i>
DEVELOPMENT OF A METHOD OF REPRODUCTION OF BUILDINGS FROM A PHOTOGRAPH WITH A MAP <i>K. NISHIHARA, S. NISHIHARA – Japan</i>	SPACE SUCCESSION OF TIDUNG’S DAGAT VILLAGE IN BORNEO <i>R. OISHI, N. ANDO, M. TANEDA – Japan</i>	RESEARCH ON IMAGE MOSAIC ALGORITHM BASED ON OPTIMIZE FOURIER-MELLIN TRANSFORM <i>X. LUO, Q. LUO, B. HAN – China</i>	SHADOWS DESIGNING CONIC SECTIONS <i>A. NASTASI – Italy</i>
THE INTERFERENCE AREA AND THE INTERSECTION OF TWO CONES WHOSE AXES ARE NOT COPLANAR <i>Q. YU, Y. QU, L. LI – China</i>	VISUALIZATION AND HAPTIC RENDERING OF ANCIENT WOODCARVINGS IN SRI LANKA <i>R. P. C. J. RAJAPAKSE, Y. TOKUYAMA, A. MARASINGHE, K. MIYATA, R. SOMADEVA – Japan, Sri Lanka</i>	GEOMETRICAL ASPECTS IN RECONSTRUCTION OF THE CYLINDRICAL PANORAMA <i>J. DZWIERZYNSKA – Poland</i>	EDUCATIONAL AIDS IN GRAPHICAL EDUCATION <i>I. JURANE – Latvia</i>
A DESCRIPTIVE APPROACH FOR THE STUDY OF ORIGAMIC ARCHITECTURE <i>L.-Y. CHENG – Brazil</i>	STUDY ON THE SPATIAL FUSION OF JAPANESE RAILWAY STATIONS AND THEIR SURROUNDINGS <i>T. SHIMADA, N. ANDO, M. TANEDA – Japan</i>	USING FRACTAL GEOMETRY TO EXTRACT FEATURES OF THERMAL IMAGES FOR EARLY BREAST DISEASES <i>R. C. SERRANO, R. C. F. LIMA, R. H. C. MELO, L. S. MOTTA, A. CONCI – Brazil</i>	USING GEOMETRIC FIGURES TO EXPLAIN THE SHAPE OF THE SUN AND GREEN FLASH PHENOMENON AT SUNRISE AND SUNSET <i>M. OHNISHI – Japan</i>
	THE PLANE FORMS OF JAPANESE DEPARTMENT STORES – A STUDY ON THE VARIETY OF FORMS OF BUILDINGS <i>M. TANEDA, M. UCHIDA, N. ANDO – Japan</i>	CURVATURE EXTREMALITIES FOR INTELLIGENT SHAPE AND IMAGE INTERROGATION <i>S. YOSHIZAWA, A. BELYAEV, H. YOKOTA – Japan, UK</i>	
		CHARACTERISTICS OF SCANNER PROJECTION IMAGES OF 3D-OBJECTS OBTAINED BY USE OF A LINE-SCAN CAMERA <i>K. YOSHIDA – Japan</i>	
Closing Ceremony and ISGG General Meeting			

Turned Ivory Polyhedra 旋盤加工による象牙の多面体

Tibor TARNAI Professor

Department of Structural Mechanics Budapest University of Technology
and Economics

概要

現今、中国の土産物屋では「悪魔が作ったボール」あるいは「パズルボール」と呼ばれる、翡翠、白檀、人工象牙などでできた複数の球殻が入れ子状になったものが売られている。清朝では、このような球は象牙を旋盤にかけて加工し、穴を開け、具象的彫像をたくさん施して作られていた。製造技術上、これらの球には12から14の放射状に掘られた円錐状の穴が必要とされ、これらの穴は二十面体あるいは八面体の対称性に基づいて配置される。同様の象牙彫刻がヨーロッパに現れたのは16世紀の後半である。これらの製造手法はドイツにおいて開発された。象牙の旋盤加工技術は18世紀まで非常に盛んであったが、18世紀における磁器の登場とともにこの技術は途絶えた。ヨーロッパの象牙球は中国のものに比べて、滑らかな表面を持ち多面体に近い形状をしている。この多面体形状は創作者の幾何的知識の水準の高さを示し、また穴の数が12や14のみではなく他にもいろいろある（例：6, 20, 24, 26, 32）のもその幾何的知識によるものである。本論では入れ子状の象牙の球と多面体の調査研究、ならびにそれに関連した有名な象牙コレクションの例を示す（例：ドレスデン、ウィーン、コペンハーゲン、フィレンツェのもの）。

著者経歴

ティボル・タルナイは、1966年ブダペスト工科大学土木工学卒、1973年エトヴェシュ・ローランド大学（ブダペスト）応用数学卒。いくつかの建築設計会社の構造エンジニアとして、またハンガリー・ビルディングサイエンス研究所において研究員として働く。1993年よりブダペスト工科大学経済学教授。ケンブリッジ大学、オクスフォード大学、東京大学、京都大学を含むいくつかの大学において客員研究員をつとめた。30年にわたり力学と数学の境界分野である構造トポロジーを集中的に研究。特に展開構造などの可動構造ならびに離散幾何学における充填および被覆の問題に興味を持つ。応用幾何学および多面体の研究も行っている。

（訳：館 知宏）

An Introduction of the Use of 3D Digital Data of Cultural Properties (Sculpture) in Education and Research - An Example of its Use in Cultural Property Preservation at Tokyo University of the Arts -

彫刻文化財の3D デジタルデータを活用した 教育と研究の紹介—東京藝術大学大学院 文化財保存学における実例—

Satoshi YABUUCHI Professor

Department of Conservation, Graduate School of Fine Arts, Tokyo
University of the Arts

概要

私たちの研究室では、3D レーザースキャニングによって取得した彫刻文化財（おもに木造の仏像）の3D デジタルデータを集積し、教育研究に活用している。

このデータは、当研究室の学生たち（修士課程、博士課程）によって、彫刻文化財を造立当初と同じ材料と加工法によって模刻制作する実技研究に用いられている。このことで彼らは、古典技法を効率的に高度なレベルで習得し、有形文化財の保存修復に携わる高い技術と感性を持った有為な人材に成長している。

また、そのことが、失われた古典技法と造形を再生し未来に伝える一方、その知識が現代彫刻の作家達に大きな刺激となって新たな創作の源泉となることが期待されている。そしてこのデータが、美術史の分野で活用されることによって、時代特性や作家を探る新たな研究に発展していこう。

著者経歴

1953年大阪生まれ。東京藝術大学と大学院で彫刻を学ぶ。1982年から1987年まで、同大学院保存修復技術研究室において古い仏像の修復事業に従事。この経験を通じて、伝統的彫刻技法を基にした独自の彫刻技法を習得し、木彫作品やブロンズ作品のほか、版画や著述など幅広い分野で活動している。2004年から東京藝術大学大学院文化財保存学教授。

（訳：山口 泰）

BIM and its impact on Engineering & Graphic Communication Education

BIMの工学およびグラフィックコミュニケーション教育に与える影響

Clark CORY Professor

Department of Computer Graphics Technology

Construction Graphic Area of Focus, Purdue University

概要

建設業はあらゆるプロセスを効率化するための新技術で満ちている。今や全プロセスおよび個々の素材の組み立て工程の可視化は建設業における標準的な要求となった。構築のために必要とされる従来の教育手法は経験に基づくものであり、各個人が知識を獲得するために数年を必要とした。しかし、より高度な教育制度を受けている今日のエンジニアあるいは建設マネージャには、新技術を利用する能力があり、従来よりも迅速に可視化に関する教育を受けることが可能である。技術の進歩によって、可視化やシミュレーション、空間分析のために三次元モデルが必要とされるなど、市場の変化も起きている。そのような中で、Building Information Modeling（建造物情報モデリング：BIM）が建設会社で必要とされている。現在、建造物情報モデルは設計から建築まで使用され、設備管理においても使用されている。現在の技術の変化にあわせて、教育と産業が変化するだけでなく、提案されるプロジェクトを推進する上で要求される情報の質が変化している。従来からの建築のためのグラフィック教育も、現在の空間分析とBIM基準に則して発展、適合していかなければならない。

著者経歴

クラーク・コリーは1999年にパデュー大学のコンピュータグラフィック工学部に着任。着任直後、建築と建設に関するグラフィック・コミュニケーションと可視化に関する学部教育に携わった。現在、学部内において、建造物のグラフィック・コミュニケーションの開発と改善を継続している。一般住宅や産業用の建造物のプロジェクトマネージャとしてのポジションをAEC工業において35年におよぶ経験を持ち、これらのプロフェッショナルとしての経験に加えて、教育や学生組織への参加の経験も持つ。現在は産業と教育のパートナーシップ運営に携わっている。産業界には、Holder Construction, Saterfield & Pontikes, およびAutoCADとArgos SystemsInc. のようなソフトウェア開発企業が含まれる。これらのソフトウェア企業は、建設業務の可視化、建造物情報モデリング、4D CAD, 5D CAD, AECのためのアニメーション、AECイラストレーション、スマートハウス技術およびビジュアル・コミュニケーション情報の開発において彼の研究分野と関係している。

（訳：三谷 純）



Research of Digital Lead Design Process

デジタルリードデザイン開発プロセスの研究

Toshio YAMASHITA Professor

Division of Industrial Art, Faculty of System Design, Tokyo Metropolitan University

概要

近年 CAD の活用により、自動車の開発現場では、大幅な期間短縮と品質の向上が達成されてきた。しかしこれはデザインの上流開発のコンピューター化を除いての適用であった。今回、開発プロセスの中で最もコンピューター化が困難だったデザインの発想段階において、開発のプロセスを改善し、期間短縮やコスト削減を実現しながら、更にデザインを中心にした商品性の向上に取り組んだ、日産自動車の新デザイン開発プロセスを、デザイン開発の初期から活用し実プロジェクトでの活用の実態と成果・及び課題について解説する。本報告では、将来の自動車デザイン開発のあるべきプロセスの姿もあわせて考察する。

著者経歴

首都大学東京システムデザイン学部インダストリアル・アートコース教授

研究テーマは『デザインが社会に果たせる役割』。トランスポートーションを軸にした研究の中から、豊かで潤いのある社会づくりにデザインが如何に貢献できるかを模索中。現在、日本に適した電気自動車の研究を進めている。タイトルは“傘車”。前職は、日産自動車デザイナーとして自動車デザインに従事。開発の先端で数多くのデザインを手がける。代表作はフェアレディー Z 32のデザイン。2000年～2003年まで日産自動車アメリカデザインスタジオ (NDA) に在籍、チーフデザイナーとして“TITAN” シリーズ等を手がける。

(訳：山口 泰)

Discrete Gliding Along Principal Curves

主曲線に沿った離散的な滑り

Hans-Peter SCHROECKER Professor

Unit Geometry and CAD, University of Innsbruck

概要

離散微分幾何は、幾何学において大変盛んに研究されている分野である。その狙いは、微分幾何からの良く知られた概念に対する離散的な解釈の発展である。結果として得られる理論は、連続的な場合と比較するとより簡潔で具体的なものとなる。古典的な微分幾何はその大部分が解析に基づくものである一方で、簡潔な幾何学的接合定理、もしくは、閉包定理が離散微分幾何の核となる。それは、数値シミュレーションや可視化、現物物体の構築が必要とするような応用に直接役立つ。

この講演では、離散微分幾何に関する最近の結果を、空間運動学に関連づける。ここでは、回転と呼ばれる、ある特別なタイプの離散的な空間運動について研究する。重要な例として、パラメータ化された曲面上に沿った滑りの動きである。予想外のこととして、離散的な回転運動は、基本的な多次元の一貫性基準を満たし、古典的な曲面変換に関連付けられる。

これらの結果の単なる発表だけでなく、ここでは離散的な場合の回転運動の構築が、どのようにして滑らかな場合の微分幾何に置き換わるかをデモにより示したい。これより、確立された数学理論とその幾何学との関係に新たな視点をもたらすことになる。

著者経歴

Karl-Franzens University GrazおよびGraz University of Technologyにて数学と図法幾何学を学ぶ。University of Applied Arts in Viennaとthe Vienna University of Technologyに在籍の後、2004年よりUniversity of Innsbruck (Austria) のUnit Geometry and CADに加入。2006年7～9月には東京大学教養学部情報・図形部会に在籍。研究内容は、古典幾何学とその応用、運動学的幾何学、幾何学教育、凸幾何学、離散幾何学。

(訳：金井 崇)

Friday, 06.08.2010 10:30-12:00

PSI Plenary Session

開会式の後、Tibor TARNAI と Satoshi YABUUCHI の2氏による招待講演が行われた。

TARNAI は、16~18世紀にヨーロッパで美術品として製作された多面体の入れ子構造を持つ象牙彫刻をとりあげた。歴史的な背景に関する説明の後、各地の博物館に現存するコレクションの中から、プラトンの正多面体、アルキメデスの立体とカタランの立体（の一部）と同じ構造を持つ製作例が紹介され、当時の製作者が高いレベルの幾何学の知識を有していたことが示された。

YABUUCHI は、東京芸術大学での文化財修復の経験を取り入れて製作した自身の作品を紹介した後、レーザーなどの非接触計測で得た3Dデータが仏像の修復だけでなく当時の製作技法の解明にも役立つことを示した。さらに、学生が3Dデータをもとに模刻することで仏像製作技術を学ぶと共に、新たな作品を生み出す活動にも繋がっていることが示された。

(椎名 久美子)

Friday, 06.08.2010 13:30-15:10

TSI-A Mechanics & Structure

本セッションでは、キネマティクスに関する研究が3件、構造と形態に関する研究が2件の計5件の発表があった。

Paul ZSOMBOR-MUR は、キネマティクスにおける Aronhold-Kennedy の定理をベースに、平面上の2つの剛体とねじれ軸の関係においてあるいは3つの曲面を対象に、また3つのシリンダー等設定を段階的に展開し、動きと速度の相関について幾何学的に分析をした。Katsumi MORITA は、シリンダー等を用いた空間充填の理論に基づき、トーラスによる空間配置のバリエーションを示した。Edgars BERV ALDS らは、六角柱を基に位相変換し、五面体の作図を提案した。さらにそれらを用いた空間充填の可能性を示した。

Otto RÖSHEL は、G.KIPER らが考案した可動式の多面体である Fulleroid-like mechanisms を基にし、新構想のメカニズムを導入しパラメータの変更により3種類の新規のセルフモーションを示した。発表では紙の模型も示され、大変興味深い内容であった。Otto RÖSHEL は、キネマティックマッピングの手法を用い、マニピュレーターモデルをベースにし、そのワーク

スペースあるいはジョイントスペースについて分析を行い、図及びグラフによって各特徴を明確に示した。

(森田 克己)

Friday, 06.08.2010 13:30-15:10

TSI-B Formative Design

形態デザインの表題の下で計5件の発表があった。内容は具体的な形態デザイン手法の開発から絵画空間の解析まで多岐にわたっている。アンドレアーニの発表、イタリアのマネッティの自由曲面デザインを起点としてパラメトリックデザインによる自由曲面生成の可能性を示した。鈴木広等の発表は、メビウスループと放物線を用いた二つのランプシェイドのデザインし、それらを立体複写し、光の分布を検証するものである。五十嵐等の研究は、積み木ブロックの写真データから直接形状を削りぬく面を作成するもので、おもちゃへの応用が期待されている。ローディックの研究は、Rhino 社 Grasshopper によるパラメトリックデザインによって、フェルメールの描いた絵画空間を再現する方法を提示した。遠藤等はテキストを画像を組み合わせた signage と呼ばれるサインの把握しやすさに関してアイカメラを用いて検証する試みであった。

(加藤 道夫)

Friday, 06.08.2010 13:30-15:10

TSI-D Architectural Design Education

このセッションでは建築設計教育に関連する5件の発表があった。Albert SCHMID-KIRSH (Germany) からは建築設計教育への3D-Plot (ラピッド・プロトタイプ) 模型の導入に関する発表があった。Massimiliano LO TURCO (Italy) らからは建築系学科における「プレゼンテーション・テクニック」の科目でPDFやvideo file等の各種メディアを統合したポートフォリオを作成させた例について報告があった。Cornelie LEOPOLD (Germany) からは、建築における幾何学的構造主義に関する考察について発表があった。Masahiko MIYAMOTO (Japan) からは、透視図法学習以前の学生に透視図を描かせた際の誤りの分析に関する報告があった。Frank SCHMIT (Germany) からは、建築学科の学生を対象に開講されている「建築写真」の授業内容について発表があった。この授業は、建築写真

固有の表現法（あおりカメラ、画角と空間の広がり観等）をカメラの原理（≡透視図）に基づきながら講義するもので、日本ではあまり実施されていない授業かと思われるが、興味深いものであった。

（鈴木 賢次郎）

Friday, 06.08.2010 15 : 20-17 : 00
TS2-B Art

Toshio MURAMATSU は、ステンレスのスチールパイプを用いた動く造形を制作した。本研究では楕円を用いた SPACE WALK ON THE EARTH の制作を発表した。Yoshizumi FUKUE は彫刻における立体の概念について、歴史や彫刻の制作過程に関する考察を発表した。Eva WOHLLEBEN らは血球の構造で作られた多面体の弾性に関して発表を行った。血球リングをシミュレートした結果と共に、制作されたモデルが多数持ち込まれ実際に弾性を体験することができた。Aya SAITO は梅と桜の花びらの形状を対象に、家紋と実物の花との間の類似性について分析した結果を発表した。Yayoi YOKOYAMA はアフィン変換を用いた新しいフォームの3DCG 作品を制作するプロセスを発表した。

（遠藤 潤一）

Friday, 06.08.2010 15 : 20-17 : 00
TS2-D Spatial Ability

当セッションは5題の講演が行われ、活発に質問・議論がなされた。Yuya DEKI らは、建築プレゼンテーションに用いられるCGアニメーションの3D空間と製図の2D空間の関係がどのように理解されるかについて、2つのCGアニメーションテストとアンケートをもとに論じた。Kenjiro SUZUKI らは、学習指導要領の改訂に伴う図学教育への影響について、アンケートとMCTを元に論じ、高い評価を得た。Mayumi HAMANO らは、小説を読む際に発揮される場面を想像する能力に関する研究を、Spatial Imagination Test (SIT) とMCT, PITを元に論じた。Kumiko SHIINA らは、方位に関する問題を解く手段と大学で学習するために必要な7つの因子との関係について論じた。Bing-shu TONG らは、graphics と engineering graphics それぞれが抱える訓練に関して論じた。

（宮本 昌彦）

Saturday, 07.08.2010 11 : 10-12 : 30
TS3-A History of Graphics

当セッションでは、予定された4件のうち1件は発表者が欠席したため、計3件の発表があった。それらの内容は、発表順に、(1)透視図の歴史を、模像としてのオブジェクト〈a seen object〉の表現と、観念としてのオブジェクト〈a being object〉の表現という新しい視点から捉え直そうというもの、(2)19世紀の後半のイタリアのカリアリ大学における建築教育に関わる図面資料をもとに、そこから現代の類似の諸課題に適用可能な教育方法の確立を目指そうというもの、(3)1920年代以降、著名な建築家たちによって設計された一連の日本の住居の変遷を7つの構成要素から追っていくことで、現代の日本の住居を分析するとともに、可能なプランを探ろうとするものであった。参加者の国籍の多様性を反映してか、それぞれ発表の後、会場から高い関心を示す意見・質問が出された。

（小高 直樹）

Saturday, 07.08.2010 11 : 10-12 : 30
TS3-B Paintings

水滴をスクリーンとした2次元映像の投影に関する研究1件、および過去に著名な画家によって描かれた作品に対する解説3件の計4件の発表があった。Kouji TAKECHI らは、水滴をスクリーンとして投影した映像の可視性について、輝度を測定することによる評価実験を行った結果を発表した。Gerhard GUTRUF らは、オランダの作家であるVermeerの代表作を紹介し、その床面のタイル形状を元に3次元空間の投影にどのような技術が用いられているかの考察を発表した。Kazuko MENDE は、吉田初三郎の描いた日本列島の鳥瞰図を紹介し、その技法に対する考察を発表した。横に長い絵であったため、巻物と関係があるか、などの質問があった。Nobuhide NAO は、川原慶賀の作品を4つのカテゴリに分類し、それぞれの特徴と絵画に含まれる直線の傾きなどを解析した結果を発表した。このセッションでは、オランダと日本という異なる2つの国の代表的な絵画を見ることができ、その違いを見てとることができた。

（三谷 純）

Saturday, 07.08.2010 14 : 00-15 : 20

TS4-D Engineering Graphics Education (1)

5件中、2件欠席で、残る下記3件の発表があった。

(1)The Development and Research of 3D Model Library Based on WEB 2.0 by K.Feng-China

(2)Evaluation of Spatial Ability of Engineering Students in Egypt using Mental Cutting Test by A. Khattab-Egypt

(3)Understanding how Students use Online Instructional Resources in a Blended Instruction Introductory Engineering Course by T. Branoff-USA

(1)はWEB2.0を用いた3Dモデルライブラリーの開発について述べている。Pro/Eを用いた3Dモデルの構築とVPML/X 3Dを用いたバーチャルリアリティ技術が中心である。(2)はエジプトのAin Shams大学1年生1076人(内女子347人)に対し、MCTを用いた図学教育の評価を行ったもので、MCT得点の男女の性差を示している。(3)は米国North Carolina州立大学におけるMoodleを用いた新しい図形教育について述べている。全164人(内2年次生80%、工学部生82%)を対象に、Moodleを用いたオンライン教材を評価している。3DにはSolid Worksが用いられていた。

(西原 一嘉)

Saturday, 07.08.2010 16 : 10-17 : 50

TS5-B Architecture and Civil Engineering

BIMソフト、Wiiを利用した実測装置の開発と実測例の報告、GISを利用したデジタルアーカイブの構想、IT技術を用いたポンペイの文化財の表現といった、デジタル環境における建築・土木作品の図面化・アーカイブ化に取り組む研究が4件発表された。

Toshiya KASHIWAGIらは近年建築実務用に導入されて話題を呼んでいるBIMツール(Autodesk社Revit Architecture)と、一般CGツール(同3dsMax)のモデリング時の操作性の違いについて報告した。Tomohiro NAKAYAMAらは、Wiiのジャイロセンサーとレーザーセンサーユニットとを組み合わせた簡便・廉価な実測装置を製作し、それによる建築部分のスキャン結果を発表した。Michelangelo FABBRINIは、イタリア・フィレンツェ周辺に遺されている19世紀の建設プロジェクトの図面や資料を整理してGIS上に表示するアーカイブの提案を発表した。Nicola PISACANEは

Carmine GAMBARDELLAらの代理として、ポンペイ市全域で行われた大掛かりな文化財調査の成果の表現手法について発表した。航空機からの地表面レーザースキャンによる古代都市の再現図や、フレスコ画に彩られた住宅の3Dモデルによる再現が目を引いた。

(横山 ゆりか)

Saturday, 07.08.2010 16 : 10-17 : 50

TS5-C Application Systems

本セッションは応用システムに関する5件の発表が予定されていたが、2件が発表されなかった。Hongming CAIらは、オントロジーを利用した大規模な情報可視化のための形状モデリング手法を提案した。この手法を用いたシステムの紹介もあった。Tatsuya MOCHIZUKIは、Web3Dを用いたエンジニアリングコンピュータグラフィックスが、デザイン例のコミュニケーションに有用であることを提案した。XVLを用いることにより複雑な設計例では、1/110程度のデータ量になり、ネットワークを介したコミュニケーションに有効であることを示した。Kazuhisa YANAKAらは、裸眼による3次元立体視のためのシステム構築に重要な3次元モデルをfly's eye lensにあわせたMulti View rendering手法を提案した。終了後、デモンストレーションに多くの参加者が集まって熱心に立体画像を見ていた。

(近藤 邦雄)

Saturday, 07.08.2010 16 : 10-17 : 50

TS5-D Engineering Graphics Education (2)

はじめの3件はVirtual Teaching Environmentや3Dモデルの利用による教育改革の概念および現状、4件目はEngineering Graphics教育に対する記号論的アプローチ、5件目は、1つの平行六面体の中に点と線と面の正投影を示し、それらの投影の基本と空間における関係を単純明快に分かりやすく教育する手法に関する発表であった。4件目の発表では、Charles Sanders Peirceによる三項関係の記号論を用いて、対象表現の第一段階を類似記号、第二段階を指標記号、第三段階を象徴記号として特徴づけることで、記号論が設計要素の構造や関連性をよりよく定義できるツールとなりえるとしていた。さまざまなEngineering graphics教育の改革に関

しては、今後、改革実施後の成果を明確に分析した発表が望まれる。

(堤 江美子)

Sunday, 08.08.2010 10:30-11:50

TS6-C Animation

シミュレーションに関する研究が3件、アニメーションの動きの分析に関する研究が1件、計4件の発表があった。Lina YUANらは、交通事故をCGによって再現するためのシミュレーションシステムに関する成果を発表した。Kensuke YASUFUKUは、人間の避難行動に関するシミュレーションとその可視化をリアルタイムで計算するための方法と、その成果を発表した。Junya SUGIEらは、ショッピングモールなどの店の配置を、人間の行動シミュレーションを通じて分析するためのシステムについて発表した。Toshihiro KOMMAらは、日本独自のアニメにおけるキャラクターの動きの解析について発表した。4件の発表内容はいずれも、人間の行動をシミュレーションにより分析・再現するためのシステムの開発という点で共通しており、大変興味深いものであった。

(金井 崇)

Sunday, 08.08.2010 11:10-12:30

TS6-D CAD/CG Education (2)

ブラの縫製技能をあげるためのマルチメディアを使用した教育プログラムとその効果の測定、プログラミングによる制御が可能なレゴブロック Mindstorm を使用したCAD教育、学習者の理解度に対応した3D-CG学習用視覚教材の効果、CG教育における学生の空間感覚の育成についての4件の発表があった。1件目の発表では研究目的が明確に示され分かりやすい発表であった。2件目の発表では、芸術文化学部におけるレゴを使用した interactive art programming 授業とCAD教育との関連性が今一つ分からなかった。4件目の発表では、3D-CGソフトウェアを使用する課題において、形状のイメージを明確に頭の中に描く必要がある課題の成績は授業後MCTとの相関が高く、形状の数値情報が与えられていたり実物を何度でも観察できるような形状作成課題では授業後MCTとの相関が低かったという。

(堤 江美子)

Monday, 09.08.2010 09:10-10:30

TS7-B Pattern & Image

パターンに関する研究が2件、イメージに関する研究が2件であった。Ornella ZERLENGA等は欠席のためにNicola PISACANEが代わって発表した。イタリア・Pompeii遺跡の幾何学的なモザイクの敷石を分析し、データベース化したものであった。Luigi COCCHIARELLAは、絵画における透視図と斜投象の表現がその地域の文化的背景に関連していることを、西洋と日本の絵画を比較しながら考察した。日本の作品についてよく調査されていた。Hirotaka SUZUKI等は、龍安寺石庭の石の配置をボロノイダイアグラムによって組換え、分析した。Douglas J. DUNHAMは、M. C. Escherのトカゲとコウモリと魚で構成されたオリジナルの連続紋様をさまざまに変換させてみせた。このセッションでは、具体的な作品を対象に、関係性の考察もしくはシミュレーションをしており大変興味深いものであった。

(面出 和子)

Monday, 09.08.2010 11:00-12:40

TS8-C Image Processing (2)

画像処理アルゴリズムに関する研究が4件、ラインスキャンカメラにより撮影した画像の特性に関する研究が1件の計5件の発表があった。Xiao LUOらは、フーリエ・メリン変換をベースとしたモザイク画像アルゴリズムを用いて、画像の重ね合わせ位置を検出する手法を発表した。Jolanta DZWIERZYNSKAらは、円筒パノラマ画像から3次元情報を復元するアルゴリズムを開発し、その適用結果を発表した。Rodrigo C. SERRANOらは、サーマルイメージから乳房疾患を診断するため、フラクタルジオメトリを用いる方法を提案し、その事例分析結果を報告した。Shin YOSHIZAWAらは、CURVATURE EXTREMALITIESによる多次元画像のエッジ検出アルゴリズムを開発し、その性能評価結果を発表した。Katsuyuki YOSHIDAは、ラインスキャンカメラにより3次元物体を撮影した際、1方向が平行投影図、1方向が透視投影図となる画像特性に対する考察を発表した。このセッションでは、様々な投影図や多次元画像に対する解析方法、応用事例を見てとることができた。

(安福 健祐)

Impressions of the 14th ICGG Conference

Ted Branoff

(ISGG President, North Carolina State University, USA)

I want to thank the Japan Society for Graphic Science for co-sponsoring the 14th International Conference on Geometry and Graphics held August 5–9, 2010 in Kyoto, Japan. Chair of the local executive committee, Hiroataka Suzuki, and the members of your society were extremely well organized and created a wonderful atmosphere for sharing knowledge, fellowship, and celebration.

I will remember many things from this conference, but I want to highlight a few of them. I was very impressed with the rich history of your country. Although I did not get a chance to sight-see as much as I wanted, the excursions provided through the conference gave me a taste of the great traditions and culture of Japan. The Ooe Nougakudou was an impressive display of the arts and gave the conference attendees a feel for how this type of theater has been handed down over the years. The trip to the KIYOMIZU-DERA temple was a wonderful exhibition of Japan's spiritual and architectural history. I know you are proud of these traditions.



Another thing that I will remember from Kyoto was the interaction between the conference attendees. I witnessed deep intellectual conversations and discussions, old friends coming together to renew their relationships, and young professionals making new

contacts with people from around the world. The technical sessions created a unique forum for sharing our academic endeavors, while the banquet at the Garden Oriental Kyoto was truly a celebration of our time together. I sincerely thank you for organizing such wonderful events.

I want to close by personally thanking those from the JSGS who have influenced my professional life in ways that I never imagined – Emiko Tsutsumi, Michio Kato, Kunio Kondo, Yasushi Yamaguchi, and Kenjiro Suzuki. When I first traveled to Japan in May of 2007 to speak at your 40th Anniversary Conference, I learned then that you and your society were very special. I thank you all for your dedicated service to the JSGS and the ISGG.

第一回図学会創立大会と 第十四回 ICGG

宮崎 興二

1970年に誕生したわれらが図学会は、2010年でちょうど40歳となる。その間、各年度の全国大会や各支部会、さらには国際会議など数多くの会が持たれてきた。その中でおそらくもっとも特筆すべきは最古の1970年の第一回図学会創立大会と最新の2010年の第十四回 ICGG に違いない。確かではないが、その両方に参加した会員はおそらく筆者一人で、しかも筆者はその両会議で、意図せずして非常に目立つ立場に置かされてきた。その珍しい体験談を紹介する。

第一回図学会創立記念大会

第一回創立記念大会は70~80人が参加して東大教養学部で開かれた。参加者の大半は当時50~60歳で、この40年のあいだに残念ながらどんどん姿を消していかれた。幸い筆者は弱冠30歳だったので何とか無事に40年の歳月を乗り越えられたことになる。

じつは明治調の当時の図学は定年間近の有閑層が授業形態を整えるために行う基礎教育で、未来ある若手が研究対象にするものではなかった。が、一企業から一私大助手に転職したばかりの筆者は、大学とは、研究か教育かに関わらず、何でも好き勝手なことができる結構な場所と思いついていた。だからふと勝手に思いついた4次元図形の作図方法について、恥ずかしながらしゃべるべく参加したのである。

ところが無名の若造によるこの思いつき発表は、意図せずして最初から目立ってしまい、その日のうちに神戸大学に転職する手続きが始まったりした。須藤利一初代会長が突如「4次元図学入門」という予定外の特別講演をするといいながら突如中止したということもある。懇親会では某教授が、4次元は教授会を煙に巻く格好の道具である、と挨拶された。

こうして筆者は4次元図形のとりこになる一方、伝統文化の関西に住んでいたため多角形や多面体の歴史にも関心を持った。つまり謎めいた未来の高次元図形と過去の低次元図形は、筆者の二足のワラジのテーマとして、図学会会員のみならずあたり一面の人びとを煙に巻く道具となった。この煙はその後一部のマスコミによって次第に濃くなりながら広がり、ついには何をしているかわからない黒雲のように大きくなった。今や筆者を雲の上の神様だと持ち上げる人がときどきいるが無理もない。

第十四回 ICGG

やがて京大に席を移したりしながら2010年を目前にしたころ、突如、第十四回 ICGG を京大関係者が何と云おうと京大で開く、という大迫力の大本営通達が届いた。もしそれに従うと国際紛争に巻き込まれて戦死するのは間違いない。あわてて二足のワラジを煙幕に使うのが手遅れだった。大本営の指令で、すぐ神戸在住で大阪勤務のあの鈴木広隆氏が京都に名将軍として乗り込んでこられ、招待講演者の一員に入るよう迫ってこられたのである。氏によると、かねてから図学の神様つまり現人神と思っていた筆者が出ないことには国際紛争は治まらないという。お世辞とはいえないではないか。加えて氏の、三都を股に掛けた孤軍奮闘ぶりに感動した筆者は降伏することにした。そのあと現人神にふさわしい待遇についてかなり深刻な密談が繰り返され、結局、異例の歓迎講演をすることになった。といっても筆者には ICGG で恥をかかない講演をする自信はなく、やむなくまたまた二足のワラジで煙に巻くことになって、過去と未来を駆け抜ける4次元時空間の連続体の話をするようになったのである。当日の英語の棒読みはたどたどしかったが、現人神には常のこととしてお忘れ頂きたい。

京都大会雑感—東京大会から16年

鈴木 賢次郎 (東京大学名誉教授)

京都大会は酷暑の中での開催となったが、広やかな会場での学術プログラム、過不足のない社交プログラム、また、妻は同伴者プログラムへと参加させて頂き、暑さも含めて(!)十二分に会議を楽しませて頂いた。会議の期間中、折に触れ、私の心をよぎっていたのは、「よく、図学国際会議(ICGG)、国際図学会(ISGG)がここまで生き延び、成長したなあ」という思いである。

このシリーズの国際会議は、初めASEE(American Society of Engineering Education)のEDGD(Engineering Design Graphics Division)創立50周年を期に同部会の主催でバンクーバーにおいて開催されたもので、その名称は“International Conference on Descriptive Geometry”と、まさに“図法幾何学”に関する国際会議としてスタートしたものである。第2回は北京で開催されたが、その名称は“International Conference on Engineering and Computer Graphics”と、図法幾何学の名称は削除され、機械工学、コンピュータがキーワードとして付加された。第3回はウィーンで開催され、その名称は“Third International Conference on Engineering Graphics and Descriptive Geometry”と、図法幾何学が復活すると共に、コンピュータという用語は隠された。また、初めて“第3回”と継続性を意識した名称となった。第4回のマイアミ大会では、その名称は3度変更され、International Conference on Engineering Computer Graphics and Descriptive Geometryと、コンピュータがキーワードとして復活すると共に図法幾何学の名称も残され、この会議名称は第8回のオースチン大会まで継承されることになる。この間、第4回のマイアミ大会において国際学会の設立が承認され、議論の後、学会の名称を“International Society for Geometry and Graphics”、すなわち、“かたち(幾何学)と図”に関する国際学会とすることとなった。第9回のヨハネスブルグ大会からは、国際会議の名称も学会の名称に合わせて変更され、“International Conference on Geometry and Graphics”となり、現在に到っている。

日本においては“図学”という大変に便利な(曖昧な?)名称があるため、当初より、この一連の国際会議を図学国際会議、また、国際学会を国際図学会と称しているが、その正式名称(英文)の変遷が示すように、

「我々のディシプリン/アイデンティティーは何か!」について模索し、議論を続けてきた—更に言えば、「議論せざるを得ない(危機的な)状況にあった」と言えよう。現在の国際会議・学会の名称—“Geometry and Graphics”、すなわち、“かたち(幾何学)と図”—には、もはや、手描きをイメージさせる“図法(幾何学)”も、(図学にとっては単なるツールである—と私は思う)“コンピュータ”もなく、また、応用分野を限定しかねない“機械工学”もなく、我々のディシプリン/アイデンティティーを適切に表したものと言えよう。

16年前、第6回の国際会議が東京で開催され、214名(23ヶ国/他に同伴者32名)の参加者を得た。それまでの国際会議の参加者は100名内外に留まっており、東京大会の際、国際会議の創設者である米国のスレイビー氏から「東京大会が国際会議のピークとなろう」と言われた。当時は、まさに、我々のディシプリン/アイデンティティーは何かの議論が吹き荒れていた頃であり、図学はどこへ向かうのか不透明な時代であった。幸いにして、氏の予想はずれ、前回のドレスデン会議においては257名(30ヶ国)、また、今回の京都大会では223名(30ヶ国)と東京大会を上回る参加者を得ることができた。また、たんに参加者数が多いというだけでなく、その講演内容は、理論図学(幾何学)、その機械・建築・芸術等様々な分野への応用、図学関連教育と、まさに、学会・会議の名称にふさわしいものに広がりつつある。図学の発展を願って、いささかの努力をしてきた私としては、ここに至る様々な事共が胸をよぎり、冒頭に述べた思い(感傷)に至った次第である。

そんな感傷はともかく、今回の京都大会は十二分に楽しませて頂いた。これは、ひとえに準備・実行に当たられた日本図学会の同僚諸氏のお蔭である—心からの感謝の意を表したい。

組織委員ことはじめ

吉田 勝行 (大阪大学名誉教授)

ICGG2010京都大会の御成功、真にお目出度う御座います。非常に穏やかな感じの良い会で、それが京都の佇まいとよくマッチして、まことに名運営であったと思います。これも、ひとえに鈴木広隆実行委員長の穏やかな人柄と、それを支えた実行委員会各位の努力の賜物で、新米組織委員の一人として、厚く御礼申し上げます。

「よきひとの仰せをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」という言葉がありますが、最初に京都で次回ICGGをとこの話をうかがったとき、本当に出来るのかなという疑念と共に念頭に浮かんだのがよき先達竹山元会長の「図学会は、必ず成功しますよ」と常々何につけてもおっしゃっていたお言葉でした。その後関西の実行委員会を眺めていて、実行委員の年齢制限をどの辺にするかという辺りと、旅行社を何処にするかの辺りで、一言申し上げた方がよいかと思わないでもありませんでしたが、鈴木委員長は穏やかに事を納められ、結果的に関西実行委員会を良い方向に引っ張られました。「図学会は、必ず成功しますよ」は、こうした時宜を得た良き積み重なりが生じるポテンシャルが図学会には伝統的にあるよということであり、組織委員としてはその言葉の主を「信ずるほかに別の子細なきなり」で、ただ信じて見ていればいいのだとつくづく再認識させられました。

今から半世紀前の昭和30年代の中頃のこと、1番柳田、2番田宮、3番榎本、4番山内、5番葛城の強力ミサイル打線を擁する大毎オリオンズ(現ロッテの前身)は、「金も出すが、口も出す」オーナー、ラッパこと永田雅一氏のもと、パリーグのベナントを得ることはありましたが、ついに日本シリーズを制することはありませんでした。図学会の組織委員会が「金は出すが、口は出さない」をモットーにしているのは、当時を知る人たちが始めた知恵ではないかと思っています。十数年後、これから図学会に入ってくる世代でまた新たな実行委員会が構成されるときにも、こうした伝統が届くといいですね。

図学国際会議で強く印象づけられたこと

西原 一嘉 (大阪電気通信大学)

今回の図学国際会議は感動の連続であったといっても過言ではない。特に強く印象づけられた事項をいくつか記すことによって、図学会の次代を担う先生方への伝言としたい。

その1: 「成功への執念と行動力」

堤江美子先生を代表とする組織委員の先生方は準備委員会の段階から組織委員会、実行委員会との合同委員会の段階まで、何度も何度も会を重ね、図学国際会議成功のための体制づくりを着々と進めて来られた。その成功へのすさまじい執念と抜群の行動力に驚いている。

その2: 「おもてなしの心と周到な準備」

鈴木広隆先生を代表とする実行委員の先生方は参加者特に海外からの参加者に対し、満足して帰っていただくことを第一に考え、実行委員会、分担者の個別会合を重ねて来られた。その行き届いた「おもてなしの心」と献身的な行動に驚いている。

その3: 「ベテランと新人の連携」

組織委員会においても実行委員会においても、初めから、「新人を全面に立て、ベテランがこれをサポートすることにより、経験を次代に引き継ぐ」という考えが徹底されていたように感じられた。

その4: 「京大の協力」

伊従勉先生が京大での開催を快諾していただいたことが、国際会議成功の突破口であったと確信している。これにより、京都の魅力が増し、海外からの参加者が国内からの参加者を上回るという、空前絶後の国際会議になったと考えている。

その5: 「企業展示の併設」

図学関連の最先端の機器である、「3次元CAD」(オートデスク社、ソリッドワークス社)、「3次元プリンター」(アルテック)、「3次元スキャナー」(ニューリー)、「光脳機能イメージング装置」(島津製作所)の展示の併設は図学国際会議に大きな花を添えることができたと考えている。

《円相》の気持ちで

面出 和子 (女子美術大学)

ドレスデンの会議の閉会式で、次回の京都での開催が決まりました。そのとき、日本図学会として加藤道夫前会長が、京都の紹介と開催のコンセプトを発表されました^[1]。それによると、京都大会では、心構えとして禅に由来する「わび・さび」の精神による日本流のもてなしをしたいと述べられました。その会が終わって、すぐにロゴマークとして《円相》をテーマにしてみても言うことを、デザイン担当の齋藤綾さんと話しました。今回採用された《円相》のロゴマークはここから始まりました。彼女は、100枚以上の《円相》を揮毫したようです。これまでの国際会議のロゴマークは、きちりとした幾何学的な図でした。16年前の東京大会の時は、佐々木仁先生による富士山にコンパス、前回ドレスデンでは世界地図に四次元の立方体を重ねたものでした。しかし、図学に関わる領域のエッジがよりファジーになっている近年を象徴するのは、きちりした直線や曲線ではないのではないかと感じていました。

「円相」の円は、角がなく、まるいかたちです。この切れ目もない、欠陥のない円満な相が、大空のごとく再現がなく広大で、わだかまりのない心境に通じるものとして、禅宗では最高の悟り／真実／無限をあらわす究極の形とされています。図は白隠による《円相図》です。そんなことから、このシンプルな円のかたちが、今回の会議にあたって、包み込むようなもてなしと、これからの図学の発展を象徴できたらと考えた次第です。みなさんは、今回の《円相》をどのように感じられたのでしょうか。



白隠慧鶴，《円相図》，江戸時代（18世紀），紙本墨書，46.8×55.6cm，永青文庫蔵

東京大会では、私は視覚デザインをほぼ一人で担当させて頂きました。まだインターネットが普及しておらず、最初に封筒とレターヘッド付きの便箋をデザインしました。夜遅く、渋谷の郵便局で大量の郵便物に料金別納のスタンプを押して発送したことも懐かしく思い出されます。私自身は、この時にはじめて自分用のパソコンを購入し、誰からも教わることもなく悪戦苦闘しながら、あらゆるデザインをしました。しかしながら、16年後の今回、情報伝達の状況はまったくちがったものになりました。封筒は今回もデザインされましたが、次々に送られる情報は、多くが電子媒体でした。より早くより多くの情報を発信するためには、情報の整理、つまりデザインが重要です。その意味では、たいへんな仕事だったのではないかと思います。そして最終的にも、会場サインに始まり、配布される Proceedings や DVD などの印刷物などもありました。齋藤さんをはじめみなさん、ほんとうにご苦労さまでした。私の場合、東京大会でいろいろとやったことが、その後の私に、ある自信のようなものをもたらしたと思います。齋藤さんがこれを機に成長されることを期待します。

京都の夏はとにかく暑く、走り回っていた鈴木広隆実行委員長の背中では、いつもシャツが汗で張り付いていました。しかし実行委員長だけでなく、とりわけ関西の方々の活躍には頭が下がるおもいです。また学生スタッフの笑顔でさまざまなことに対応していた姿が印象的でした。私にとってこの京都の暑い夏は、温かく包み込まれた時間を過ごさせていただいたように感じられます。どうもありがとうございました。そしてお疲れ様でした。加藤前会長がプレゼンテーションされた目標は、十分に達成できたのではないのでしょうか。

[1] 加藤道夫，第14回国学国際会議の京都開催決定，図学研究第42巻4号，2008

図学国際会議 ICGG2010 雑感

横山 ゆりか (東京大学)

日々、東京の様な喧噪の中にいるとすっかり忘れていたのですが、国際会議に出るとときどき思い出す感覚があります。

それを始めて感じたのは、ローマ大学でのとある国際会議でした。研究を発表する声ははっきりと皆の上を通り、けして大きな建築ではないのですが、白く天井の高い部屋に熱気が籠る瞬間。そしてやはり天井が高くはあっても声の通らない廊下で、抑制の利いた声高さと交わされるあちこちの議論や会話を聞くとともに聞きながら歩く瞬間の「心地よいざわめき」です。

私には、それを感じた瞬間が最も「ああ、良い会議が行われている」と感じられる瞬間で、国際会議に参加するのは、ひとえにその瞬間に身を置いてまた研究を営む糧にするためなのですが、この夏、京都の会議では、同じ体験をすることができました。私の聴いた「折り紙」のセッションや「教育」のセッション、セッション間に明るく景色の良い廊下で交わされていた議論の数々、また朝、会場が開くのを待ちながら風通しの良いポーチの日陰で交わされていた会話さえ、その「心地よいざわめき」を感じさせるものでした。

この「心地よいざわめき」は、いくつものことに支えられて現象しています。会議に参加された一人ひとりの研究者の方が保っている、準備をしてここにあるという高揚感と会話や議論を楽しむジェントルマンシップ。それを包み込んでいる「時計塔」の建築環境の清潔さと主張しすぎない豊かさ、音の抑制の効いた空間のつくりもあります。京都という場所の持つ雰囲気もあると思います。しかし、それらの裏に、この落ち着いた場を選び、セッティングし、緊張感を漲らせて行き来をしながら、常に穏やかに対処をしていた関西スタッフの姿が印象的でした。東京スタッフの裏方として、その準備の一端を担うことができ良かったと感じております。



実行委員会で感じた細かいこと

田中 一郎 (東京電機大学)

夏の京都の暑さは聞きしに勝るものだったが、その分印象に残る国際会議になったように思う。ICGGへの参加は初めてだったが、内容も充実しており、多彩な話を聞く良い機会を与えていただいて感謝している。実行委員としては、勝手がわからず、戦力になりきれなかった感があるのが心残りだが、その分、少し引いた視点から見られたかもしれないので、気付いた点を報告する。

私が関与した最も重要な作業は、プロシーディングス掲載用の extended abstract と full paper のひな形 (テンプレート) と執筆要領作成だった。実はこの作業、審査用の extended abstract がそろい始めてから短期間で行われた。今思うと、call for paper 発信の前に、検討しておく良かったように思う。実行委員会立ち上げ当初は時間的にも気分的にも余裕があったので、もっと丁寧な作業ができたと思うし、周知期間も長くとれた。

Full paper のひな形と執筆要領は、ICGG2008のものをほぼ流用した。問題点はちゃんと修正したつもりだったが、著者から何点か問題点の指摘を受けた。しかし、公表後に問題点が見つかったも、一旦公開したひな形や執筆要領の差し替えは難しく、最終版にも指摘された問題点が残ったままである。前の会議のデータを参考にする場合には注意が必要と痛感した。また、操作説明の作成・点検にあたり、英語版のPCが一台あると良かった。

委員会の議論や、主要メンバーの献身的な努力を目の当たりにして、十分手伝えない申し訳なさとともに、有能な(当然時給も高い)研究者の時間を潤沢に使うプロジェクトの贅沢さを感じた。たとえばサポート要員として若手をメンバーに加えられれば、主要メンバーの負担も軽減でき、当人にとっても良い経験になると思うのだが、専任の特別研究員などを配置できるシステムは作れないだろうか。

また、実行委員のメンバーは研究者ばかりだったが、事務処理のプロ(ベテラン秘書など)がいると良かったように思う。文書作成や手続きを始めてみて、初めて決定事項の漏れに気づくことがあったが、研究者とは異なる観点から決定事項を点検してもらうことで、より効率的に準備できたのではないかと思う。

1, 100km 彼方の国際会議

宮腰 直幸 (八戸工業大学)

今回、実行委員はおろか、国際会議自体に初めて参加させていただきました。そもそも国際会議といった会は大変縁遠く、図学会より第14回国学国際会議が京都で行われる、というアナウンスがあった際も、恥ずかしながらこれに参加するという考えは全くありませんでした。しかし、後に図学会より実行委員としてご指名をいただき、であれば論文の方も参加せねばもったいない、という消極的な理由により論文まで出させていただいた次第です。理由は分かりませんが実行委員へのご指名を頂いたのは大変良い刺激ときっかけになったかと思います。

実行委員のご指名を頂きましたが、全く経験がないため、正直なところ何をやるのかは全く分かりません。2009年度大会にて行われた実行委員の打ち合わせにてようやく内容が掴めたものの、なんとも大変なことを引き受けたような気がしたものです。その後の会議は遠方のため一度も出席できず。メールのやり取りを見ていると皆さん大変そうでした。申し訳ない思いはあるのですが何かできることがあるわけでもなく、とりあえずは当日合流してからだと思以外にない、という状況で京都に向けて旅立ちます。やはり距離の隔たりは大きな壁です。実行委員の皆さんと合流しても出来る事といえば力仕事のみ、と割り切って仕事をします。やれたことといえば、会場設営、Coffee Breakの準備、道案内程度でしょうか。頭は使えませんから、体を使ってお手伝いをさせていただきました。初めての国際会議でしたが、実行委員として活動できた分、居場所があって有難かったところもあります。

会議の運営で印象に残るのはCoffee Breakほかで頑張ってくださった学生の皆さんの優秀さです。大変明るく、活気があり、機転が利いて、チームワークが秀逸でした。我々実行委員だけでは手の回らない種々のことに、本当に良く気が付き、傍で見ていて関心いたしました。

私自身の発表は最終日でしたので、エクスクーション、パンケットまでは実行委員としての活動に専念させていただきました。今回の国際会議、他の国際会議を知らないので比較はできませんが、大きな問題が起きることもなく進めることができ成功だったのではないかと思います。なにより全体の運営をしてくださった諸先生のご尽力の賜物と思いますが、末席に加えていただけただけでも有難く、少しはチーム・ジャパンに貢献できたのではないかと自負するところです。

初めて実行委員として国際会議に参加して

榊 愛 (摂南大学)

私にとってこの図学国際会議は、実行委員として参加した初めての会議であるとともに、初めての国際会議でもありました。また、この4月に教員になったばかりで、学生としてではなく教員として参加した初めての会議でもあります。初めての経験は「印象深く、いつまでも心に残る」と言われますが、この「初めて」ばかりの国際会議はやはり、私の心の中にはっきりと残っています。

実行委員のお話を頂いたのは、会議の1年以上前のことでした。そのときには「国際会議とはどんなものか」「実行委員の仕事とは何か」を全くわからないまま、「国際会議」という言葉の響きに惹かれ、喜んでお受けしたことを覚えています。その後、国際会議という大舞台の準備の大変さを知るには、そう時間はかかりませんでした。一番心に残っているのは、実行委員会のメーリングリストで交わされていた活発な議論についてです。「少しでも良い会議になるように」「少しでも参加者に喜んでもらえるように」と繰り返されるメールでの議論は、会議が近づくにつれて増えていきました。実行委員の先生方には、日々のお仕事があるにも関わらず、その上、この大変な準備に熱心に取り組まれている姿を拝見し、敬服致しました。

一方、実行委員としての私の仕事は、主に関西支部の財務でした。私は、会計についての知識を全く持っていませんでしたが、会計処理についてはもちろん、海外の参加者に英語で参加費用について説明するときの表現方法など、椎名久美子先生が1つ1つ丁寧にご指導くださったおかげで、なんとか最後まで務めることができました。ありがとうございました。

先日、ある学会で来年開催される国際会議の実行委員の話の話を頂きました。これほど早く「初めての経験」を活かす機会が訪れるとは思いませんでしたが、図学国際会議で先生方から学んだ経験を活かして務めたいと思います。

最後になりましたが、今回、実行委員という貴重な経験を与えてくださった先生方に心から感謝致します。本当にありがとうございました。

出会いと創造の場

福江 良純 (京都八幡高等学校)

自分にとっての初めての国際会議が、地元京都で開かれた。この願ってもない幸いは、私にはまるで天からの恩恵のようでもあった。しかしながら、国際会議の運営サイドの一員としてはまったく為す術もなく、自分の研究発表以上の役を担えなかったことは、他の委員の方には深く頭を下げるしかない。

だがそれは、深謝の念と同時に深い感謝の表明でもある。千載一遇の好機、ICGG2010図学国際会議京都は私だけでなく多くの参加者に同等の恩恵をもたらしたことを確信するからである。

私が、この会議を通し最も印象深くしたのは、会議とは出会いと新しい発見の場であったということである。国内の学会で以前より知己であった先生方とも新しい関係が生まれ、海外からの参加者からは握手と記念撮影を求められ感激した。また、招待講演者の藪内佐斗司氏とは、記念撮影時に隣り合わせた縁を捕まえて、その後工房まで押しかけてしまった。

出会いと縁を文化として捉えるのは日本の伝統的美徳である。二度とない特別な瞬間とは、それを分かち合う人との体験である。会議には講演者だけでなく、子供を含む同伴者が数多く参加していたが、それらの人々は会議のもう一方の主役と言えるだろう。アメリカから来られた DaneR.Camp 氏は自身の講演の冒頭、会場で傍聴する彼の奥さんを「今日は彼女の誕生日です」と紹介し会場の拍手を彼女に捧げたのである。そうしたこと全ては、国際会議と言う場が生んだ一期一会。これこそ、京都の地に皆が集うことで発生した創造的空氣が促したのではないだろうか。

出会いの場はコミュニケーションを通して文化創造の力となる。ICGG2010の5日間は、私にそれを強く知らしめたのである。



Camp 氏との記念撮影。氏から発表で用いたパズル“The tower of Hanoi”をプレゼントいただいた。

「まる」

杉江 順哉 (大阪大学)

一筆で描いたような力強い丸。ICGG2010のロゴとして今夏幾度となく見たこのマークは、今となってはまさに今会議のシンボルであったように感じます。

私にとっては初めての国際会議でしたので、学生スタッフとして発表者として期日中はわからないことだらけの毎日でした。参加者の方々を戸惑わせてしまうこともあったかと思われませんが、先生方のお力添えや他大学の学生との協力によって、無事成功裏に終わったことをうれしく思います。

連日の会議は真剣ながらも穏やかに進行していったという印象です。カーテン越しに柔らかな光が落ちるホールの中、どの参加者も発表を熱心に聞いておられ、大変心地よいセッションになっていたのではないのでしょうか。プレゼンテーションでは図や動画も多く使われ、発表の姿勢は勉強になりました。自身の英語力がもっとあればより多くの内容が理解できたのにと悔やまれます。

運営については、設営の準備で朝早くに時計台の下に集まってから、エクスカージョン、バンケットに参加するまでの四日間は本当にあつというまに過ぎたという印象でした。そんな中参加者や会場は徐々にひとつにまとまっていったような気がします。エクスカージョンには、バスが軒並み定員になるほどの人数が参加され、京都という観光地を楽しんで頂けたのではないのでしょうか。観光中は、トイレの位置を尋ねられる方が多かったように思います。またその後のバンケットでは大変おいしい夕食を頂きながら大合唱のBGMという打ち解けた雰囲気の中、色々な方々と話をすることができ、大変よい経験となりました。共に大きな青い丸を背負った学生と労をねぎらい合ったことも思い出です。

様々な初めてを経験したICGGへの参加でしたが、参加者やスタッフがひとつになれたということ、また運営の成功を意味して、抱いた印象は大きな「まる」です。



外国人留学生としての参加

スリーピアン・ピーラー (東京大学)

ICGGでは幾何学分野での研究が多く、画像処理を研究している私にとっては、それらの研究を理解することは難しいのではないかと感じていました。また今回のICGGは日本での開催ということもあり、多くの参加者が日本人であろうと予想していたため、留学生の私にとっては多少心細い気持ちもありました。

開催地の京都に到着し、ホテルにチェックインを済ませると、私は早速、会場の京都大学に向かいました。会場ではスタッフの方々が親切に案内をしてくださり、参加登録なども無事終えられました。会場に到着して10分も経つと、ICGG2010の開催を告げるウェルカムセッションが始まりました。

意外にもICGGは外国からの参加者が多く、しばらく英語から離れていた私にとっては久しぶりに英語を話す機会となりました。残念ながら、私のような学生から参加している方は少なく、先生方と話すのに気後れする部分もありましたが、休憩時にはいろいろな方に声をかけていただき、こういった場で意見交換できたことは貴重な体験でした。

学会においてはペーパーセッションだけでなく、毎日1時間ほどの特別講演もあり、多くのセッションに積極的に参加しました。これまであまり関わることのなかった分野についての話が多く、最初は理解するのが困難を感じましたが、話を聞いているうちに、とても興味深い内容であることが分かり、今回の学会で多くの新しいことを知ることができました。

以上が私が初めてICGGに参加した感想です。もし私と同じような不安を抱えている方がいらっしゃるようにでしたら、この感想が少しでもお役に立てれば幸いです。

国際会議デビューに失敗する方法

種田 元晴 (法政大学)

この度、初めて国際会議にて発表をさせて頂きました。貴重な頁を割いて自らの恥と失敗と反省を曝け出すことで、英語が出来ないから…などのネガティブな理由でまごついている少なくないであろう学生の方々に激励し、今後開催される国際会議への参加者増加に少しでも貢献できたらと思います。

今回の図学国際会議には、私の所属する安藤直見研究室では大学院生は全員発表しようという話になっていました。日本図学会では何度か発表させて頂いておりますが、それでも毎度先生方の前で自らの無知を露呈しているのだけなのではないかと緊張しっぱなしです。英語が全くのダメダメな私にとって今回の国際会議は、いつもの国内学会での発表に激増して不安と緊張でいっぱいでした。そんな折に、指導教官である安藤先生から、先生の初めての国際会議参加も16年前の東京での図学国際会議であり、国内で国際会議が催されるのは国際会議参加の絶好のチャンスだというお話を伺い、半ば運命的にこの機会を捉え、とにかく何とでも京都での図学国際会議には参加しなければならないという思いを強くしました。英語の原稿は、とにかく過去の論文の表現を真似して何とか乗り切りましたが、問題は発表、とくに質疑応答です。発表の数日前には、事前に安藤先生と一緒に発表することになった研究室の大学院生らとともに、ネイティブの方を招いてのリハーサルも行いました。リハーサルをして英語の出来なさを更に痛感し、緊張と不安は増すばかりでした。そして迎えた当日、発表自体は事前に作成した原稿を読み上げたのでそれほど難はありませんでしたが、やはり質疑応答で危惧していた通りのことをやらかしてしまいました。司会の方がかなり平易な英語で質問下さっていたにも関わらず、全くとんちんかんな回答をした上に行き詰り、挙句に出た言葉が“I beg your pardon.”…。質問をして下さった方もそれ以上に平易には言えないので、ご質問を諦められるというなんとも情けない事態を招いてしまいました。

以上、情けない回顧録ですが、それでも、ポジティブに捉えれば、英語による意思疎通に関して無知の知を得る機会でもあったと思いますし、英語が出来ないからといってまごついているよりは思い切って参加して赤っ恥をかく方が、その後に危機感を持って勉学に励むきっかけになったかなとも思います。そして今、この原稿を書きながら、改めてその危機感を思い起こしているところでもあります…。

世界の中の日本の大きさ

武智 浩二 (大阪市立大学)

初めての国際会議への参加であった。私は会場スタッフの一員であると同時に発表者という立場でもあった。これまで学会で発表するという経験は何度か積んできたが、英語で発表するという経験は一度もなかった。更に言うならば英語は得意な方でもない。困った…。

それでも、それ以上に国際大会には魅力を感じていた。外国人の前で英語で発表をする、しかも学生のうちに！こんな機会は滅多にないと思ったし、何より自分のためになると思えた。限られた時間内で自分の研究の魅力を世界に伝えてみたいと思うようになり、発表時間を計って何度も発表練習、発音練習をしてから本番に挑んだ。

結果は半分成功で半分失敗。しかし個人的には惨敗と感じた。まずはスピーチだが、練習通り、いや練習以上に前を向いて声を張って堂々と話すことができた。この時点では、まだ私は満足感でいっぱいだった。問題はその後の質疑応答にあった。頭が働かない、初めて緊張している自分に気付いた時には頭の中は真っ白だった。そのまま私の発表は終わりを迎えた。

惨敗だし悔しかった。これまでのどんな学会とも違う雰囲気にも飲まれてしまった自分がいたことと、英語がうまく扱うことができないだけで、日本人以外、大げさに言えば世界の日本人以外には自分の気持ちを伝えることができないと感じた。事実そこで発表を終えた私にはそれが真実であった。国際大会の場で発表する外国人のすべてが母国語が英語というわけではないのに、とても流暢に話し、話し相手を見つけ楽しそうに長話しをしていた。英語が一番下手な国は間違いなく日本ではないだろうかと感じる場面も多く出くわし、日本は平和であり何事も便利であるが、そのことが日本人の目を自国内にだけとどめるのではないだろうか、など深刻に原因を考えてみたほどである。人とコミュニケーションをとるといっても大切な行為を国際大会で知り、また、あまり世界に目を向けることがなかった私には、世界の中の日本の大きさを知るよい機会となりました。

やはり参加して良かった。今でもそう思えるほど、よい機会に恵まれました。

図学国際会議2010京都大会の感想

近藤 慎二 (オートデスク株式会社, パートナーセールス)

鈴木広隆実行委員長, 山口泰副実行委員長をはじめ各実行委員の皆様, ならびに運営に係わった皆様, 大変お疲れ様でした。とてもすばらしいイベント実施であったと思います。

一民間企業に勤める私のような者からすると, このぐらいの規模になるイベントを開催する場合, イベント企画会社に丸投げしてしまうことが通常です。それを, (こう言っては失礼かも知れませんが) イベント事の専門でない皆様方だけでこれだけのものを運営された事に驚きました。また, お手伝いされているスタッフの方たちの対応もとても良かったと思います。

実施に漕ぎ着けるまでは様々なご苦労があったと思いますが, 適切な組織作りと, 成功させるということへの思いが一丸となったチームを作り出したものと思っています。日本図学会の結束の強さを知らされた思いです。

海外から参加された方々も, 満足されたことではないでしょうか。あえて, 無理失理ですが難癖をつけるとすれば, 残念だったと思うことは, 今年の夏は記録的な猛暑で暑さにバテてしまったかもしれないことと, 海外の方にはこれまた残念なことに, 予想以上に円高に振れてしまったことぐらいではないでしょうか。(といっても, どちらも外的要因でありどうすることもできませんが。)

それ以外は, 場所的にも, 運営的にも, 大変良いイベントであったと思います。参加させていただき, ありがとうございます。

追伸

今回の図学国際会議2010京都大会において, このような外野の感想を書かせていただいておりますが, 実は私も組織委員会の一委員でありました。それにもかかわらず何のお役に立つこともなく, すべて実行委員の方々に任せにさせていただいていました。お詫びしてお礼申し上げます。

図学国際会議京都大会 運営に携わって

西山 浩之 (日本通運㈱大阪旅行支店)

弊社は ICGG2010の事前及び当日の参加登録の窓口として登録料集金業務並びにエキスカッション・バンケットの運営の手伝いをさせていただきました。

登録料の集金は, 弊社作成の WEB を通じてカード決済していくのですが, お客様の中にはカード会社の承認が取れず, 複数のカードで決済したり, 一定の金額を数回に分けて決済したり, 苦労した方もいらっしゃいますが, 最終的には皆さん決済が完了することができました。

そのような方々が来日され, 会場で「カード決済では苦労かけたね」とねぎらいの言葉をいただいたのが深く印象に残っています。

また, 参加の皆様は本当に誠実な方が多かったのも印象に残っております。弊社ではホテル手配も承っていたのですが, 通常の国際学会では当日キャンセルをする方が多いのですが, ICGGに限ってはほとんどいらっしゃいませんでした。

弊社では, 今まで医学会等の国際学会のお手伝いをさせていただきましたが, これ程アットホームな学会を拝見したのは初めてです。皆さんが旧知の友人のように語り合い, バンケットの際も皆で歌を唄い合い本当に心温まる学会のお手伝いをさせていただいた事は我々にとっても大変喜ばしいことでした。

これから益々, 図学国際会議が発展されますようスタッフ一同心より祈念しております。

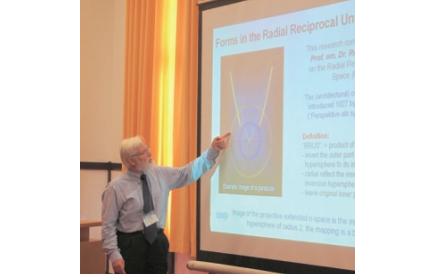
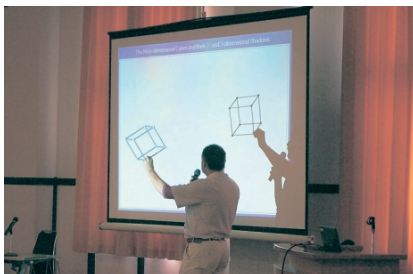
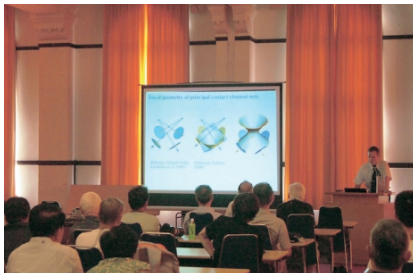
●会議登録と歓迎会●



●開会式●



招待講演と学術講演



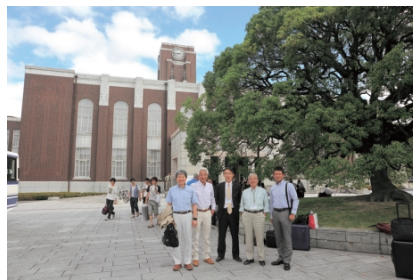
ポスターセッション



企業展示とデジタルモデリングコンテストの作品



休憩時間



エクスカーション：大江能楽堂・清水寺散策



バンケット







同伴者ツアー



ISGG 総会と閉会式



第14回図学国際会議京都大会補足

鈴木 広隆 (実行委員長・大阪市立大学)

はじめに

本図学研究では、様々な方々が図学国際会議についての報告を書いて下さっている。本稿は、国際会議に関わる様々な事柄のうち、主として鈴木が担当していて、他の方の原稿には入らないと思われるものについて、記録のために書き記すものである。

弁当及び昼食会場

会場であった京都大学百周年時計台記念館の館内にはレストランがあり、さらに建物の向かいにもレストランがあったが、これらはキャパシティやコストの問題で昼食会場としての利用が難しかった。また、記念館内で弁当を配布し、発表会場で食べることも可能であったが、参加者同士の活発なコミュニケーションのためにはスクール形式の発表会場は望ましくない、という意見も実行委員会では出ていた。このため、京都大学吉田食堂に相談したところ、弁当の提供に加え、お盆休みとなる吉田食堂を国際会議専用の昼食スペースとして提供可能である、というお話を頂いた。吉田食堂は、時計台記念館から徒歩5-10分程度の距離の場所にあったが、レストランのテーブルも参加者が気軽に話をできるようにレイアウト頂けるといふことで、ここを昼食会場とすることとした。

図1に昼食の様子を、図2に弁当が並べられた様子を示す。弁当は、和風・洋風の2種類用意し、ベジタリアン、イスラムなど、スペシャルミールのリクエストがあった参加者向けには、精進料理の弁当を用意した。会場では、畠山絹江組織委員をはじめとする委員の方々が待機し、弁当の種類の説明や配布を行った。最初に昼食を提供した8月6日に弁当が大量に余ったため、数を調整することができた8月8日以降は数を減らしたが、それでも数が余ってしまった。過去の会議における会議提供昼食の利用割合データを確認するなど、もう少し弁当の数の検討を行うべきであった。

歓迎バンケット・コーヒーブレイク

歓迎バンケットとコーヒーブレイクは、昼食と同様京都大学生協吉田食堂に依頼した。歓迎バンケットは、軽食に加え、ソフトドリンクとアルコールを用意した。これらの飲み物と食べ物は、歓迎講演が行われた会場の後



図1 昼食の様子



図2 弁当が並べられた様子



図3 コーヒーブレイクの様子

方で提供を行い、学生スタッフの笑顔あふれるおもてなしスピリットもあり、参加者は大いにバンケットを楽しんでいた。なお、歓迎バンケットについては、開会式前のイベントであったため、参加人数を少なめに見積もっていた。しかし、宮崎興二組織委員の歓迎講演への関心の高さから、予想を上回る参加者で会場があふれてしまった。飲み物や食べ物の提供は十分であったが、会場が過密な状態になってしまったことが計算外であった。

コーヒーブレイクは、コーヒー、パックによるソフトドリンクの提供を依頼し、菓子類については実行委員会

で用意した(図3)。実際には、最初の2日分ほどを鈴木が大量に買い込んで会場にダンボール詰めを送り、以降の分は学生スタッフが会場付近で調達した。京都らしい和のテイストの菓子も提供したが、参加者の評判はよく、用意した菓子のほとんどを食べて頂くことができた。また、コーヒーとソフトドリンクについては、足りなければ追加するという形をとったため、非常に経済的であった。

看板・誘導サイン

看板と誘導サインは、齋藤綾実行委員がデザインしたものを(株)アクティブKEIに依頼して作成した。学会等の看板は縦長のものを用いることが一般的であるが、今回は文言が英語であるため縦長の利用が難しく、横長(横1200mm×縦900mm)のものを用いた。このため、風対策なども考慮した。看板は3つ作成し、京都大学正門前(図4)と時計台記念館入口にそれぞれ1つずつ固定して配置し、残りの1つは室内設置の移動式として、開会式閉会式会場入口、パラレルセッション会場入口、バンケット会場、と場面に応じて設置場所を変更した。

誘導サインは、昼食会場を表す文言に矢印を加えたものを6つ作成し、移動経路に配置した。なお、会場内のサインについては、参加者に配布する小冊子に平面図が掲載されているため、特に必要なしと判断して作成しなかった。しかし、参加者はサインを頼りにするようで、受付や企業展示の部屋などが分かりにくかったため、後から会場で印刷して各所に貼り付けた。また、一番最初にレジストレーションする場所に行くには、参加者は資料なしで場所を探す必要があり、飯田尚紀委員が会場の1Fホールに立ち、参加者を2Fに誘導した。その他、パラレルセッション会場入口に設置されたホワイトボードが、サインを貼り付けたり、各種のアナウンスを書き込む場として有効に機能した(図6)。

パネル設置

ポスターセッション会場、企業展示スペース、デジタルモデリングコンテスト作品展示スペースにパネルを設置する必要があるが、看板等と同様に(株)アクティブKEIに依頼した。これは、当初の予想外の時間のかかる作業であり、ポスターセッション会場のパネル設置では、8月6日の朝に実行委員学生スタッフその他の方々が会場の椅子と机を運び出し、その後設置作業が始められた。また、企業展示スペースの作業では、パネル設置作業時になって、配置されているコンセントが使えない、ということが判明した。企業展示では機器の動作にたく



図4 京都大学正門前に設置された看板



図5 昼食会場までの移動経路に設置されたサイン

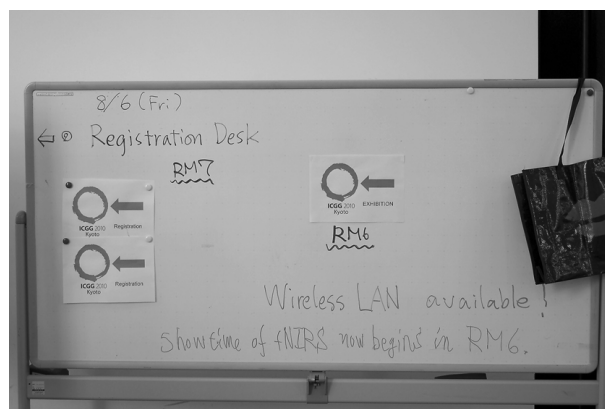


図6 会場入口に設置されたホワイトボード

さんの電力を使うため、暗礁に乗りかけたが、これも(株)アクティブKEIの手配した電気工事の方が、床下に電力供給のケーブルを見つけて下さり、急遽コンセントを設置して難を乗り切ることができた。プロフェッショナルな技術を持った方の存在を非常に心強く思った出来事であった。

参加費徴収業務代行及びエクスカージョン・バンケット手配

参加費徴収業務とエクスカージョン・バンケットの手配は、日本通運(株)大阪旅行支店に依頼した。これらの業務は、複数社に見積提出とプレゼンテーションを依頼し、図学国際会議関西 Task Group による審議の上で日本通運(株)への依頼を決定した。

バンケットの際の「ふるさと」斉唱

バンケットの際の「ふるさと」斉唱は、事前に伴奏用の MIDI ファイルを作成し、歌詞のテキストとともに組織委員実行委員の方々に送付し、歌唱を依頼した。バンケットの出し物としては、おもてなしの心をこめて多くの日本人参加者が参加して口火を切るべきであると考えていたためである。これまで図学会が参加する国際会議においては、「北国の春」が歌われることが多かったが、この歌のメロディーはヨナヌキの東洋（演歌）スケールであり、日本人の心を揺さぶるメロディーでありながら和声的にはジャズのトゥーファイブ進行が要所に配置された「ふるさと」のほうが、バンケットの最初の出し物としてはふさわしいと思い、この曲を選んだ。さらに、大西道一組織委員と堤江美子組織委員より、四季折々の日本の風景の写真の提供を受け、これらを背景として「ふるさと」の MIDI ファイルに連動させる形でパワーポイントを作成した。バンケット当日は、平野重雄組織委員の指揮で演奏が行われ、多くの日本人参加者が壇の上下で歌って下さった。みなさま、ご協力ありがとうございました。

サプライズ

図学国際会議の閉会式の最後に、会議の準備と運営に携わったメンバーの紹介があった。私自身が閉会式の進行のパワーポイントを作成していたが、メンバー紹介については全く知らず、いつの間にこのようなパワーポイントができていたのだろう、などと不思議に思っていた。途中で Theodore BRANOFF 国際図学会会長より、何かあるみたいだから、と言われ、最後に私の紹介があり、教え子でもある榊愛実行委員より花束を渡された。すべてを把握しておくべき実行委員長としては、水面下の企画も察知していなければいけないところであるが、これについては全く察知できず、突然のことに思わず涙腺が緩くなった。長い間頼りない実行委員長を支えて下さった上に、最後にこの上ない演出までして頂き、本当にみなさま、ありがとうございました。

おわりに

国際会議を半年後に控えたぐらいから、何度も夢を見た。会議は始まってしまっていて、参加者が続々と集まってくるものの、受付などの準備はできておらず、慌てて研究室の学生に会場に来るように電話をかけたり、長蛇の列の参加者の方々に謝ってまわったり、などという夢で、目が覚めると嫌な汗をかいていた。終わってみれば、そのような失敗のシミュレーションを事前に何度も行うことができたので、大きな失敗なく会議を終えることができたのかもしれない、と思える。夢といえば、会議期間中に堤先生より、「これだけ準備をしてきた国際会議があと数日で終わってしまうのは寂しい、目が覚めたらまた初日に戻っていたりしたらよいのに」と言われ、「でも、目が覚めて1年半前に戻るのは絶対に嫌です」と話した記憶がある。

会議期間中の高揚感にあふれた夢のような5日間、そしてそれに至る長く厳しい期間、素晴らしい仲間と一緒に仕事ができたと感謝しています。みなさん、くりかえしになりますが、本当にありがとうございました。そして、おつかれさまでした。